Fate/Grand Order―仮想虹彩乱戦にじさんじ―

七倉八城

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

冬木市で行われていた第四次聖杯戦争。その争いの中、一人の魔術師が大聖杯のコピーを作り出し、その偽物を持ち去ってしまう。その聖杯は贋作であり、複製元である大聖杯自体が既に汚染されていたため、本来の聖杯とはかけ離れてしまった。

その贋作がどこで、どのように使われていたかは不明である。

カルデアでは一つの特異点を発見した。場所は日本。

マスターの藤丸立香とマシュは特異点修復のため、２０ＸＸ年の日本へレイシフトした。

しかし、そこではとあるＶＴｕｂｅｒ達がサーヴァントと聖杯をめぐっての乱戦を繰り広げていた。

時は西暦２０ＸＸ年。

巷ではＶＴｕｂｅｒなるエンターテインメントが流行っており、そのＶＴｕｂｅｒに力を入れている会社がＡＮＹＣ○ＬＯＲ株式会社。そして、そこに所属するＶＴｕｂｅｒグループを【にじさんじ】といった。

総勢１００人以上のタレント（ライバー）は日夜、世界中の人々に笑顔を与えたいた。

そんなある日、とある外部の人間の提案でゲームが開催される。それが【聖杯乱戦】。総勢１００人以上で一つの聖杯を求め争う戦い。優勝賞品はどんな願いも適うことができる願望機、聖杯。ライバー達は己の願いを叶えるために聖杯乱戦に参加する。

それぞれの野望と暗躍が複雑に入り混じり、【聖杯乱戦】が開始させる。

目次

プロローグ～Ｆａｔｅ／ＺｅｒｏＡｎｏｔｈｅｒＳｔｏｒｙ～　――――　1
メインストーリー
第一節～２０ＸＸ年　東京～　――　14
第二節～暗殺者からの奇襲～　――　31
第三節～吸血少女のゲリラライブ～　50
第四節～強くて可憐なキャットはワンダフル!?～　――――　80
第五節～黄金の英雄譚～　――――　103
第六節～ＪＫセイバー、天を舞う～

プロローグ～Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ ＡｎｏｔｈｅｒＳｔｏｒｙ～

ロシア某所。

薄暗い廃墟で一人の男はとある研究に没頭していた。

部屋は小さなランプだけで照らされており、ランプの炎が揺らぐ度に部屋の影も動く。

机の上は水が入ったガラス製のコップと無数の古い書物が乱雑に積まれており、床には丸められたレポートのような紙が転がっていた。

男は一心不乱に紙に文字や記号を殴り書きする。

「これが……こうで……これが……くそッ!!」

頭を乱暴に掻きむしるとさっきまで書いていた紙をクシャクシャに丸め、床に投げ捨てる。

「違う……違う……違うッ!!」

「随分、荒れているな。アダモフ」

空きっぱなしの扉から別の男がやってきた。

青い癖毛で鋭い目つきをした中年の男だった。
部屋の主。アダモフは急な来客に苛立ちながら男を睨みつけた。
「何の用だ。ゾォルゲン」
「そう睨むな。……まだ、そんな研究をしていたのか？」
「そんな。だと……？」
ゾォルゲンと呼ばれた男の言葉にアダモフは反応する。
「私の研究をそんなものだとッ!!」
アダモフは勢いよく立ち上がり、机の上に積まれていた書物をゾォルゲンに向かって薙ぎ払うように投げつける。その衝撃でコップも倒れ、水がこぼれる。
書物は何冊かゾォルゲンに当たるがゾォルゲン本人は無反応だった。
「私の研究はマキリをより良くさせる!!　それこそ、アインツベルンや遠坂を超える!!」
「まだ、そんな妄想を追いかけているのか」
「何……？」
ゾォルゲンは布で覆いかぶされていた棚に視線を向けると、布を掴み、そのまま思い切り引っ張った。
すると棚には黄金に輝く器が無数に置かれたいた。
「こんな贋作を作り、いったい何がマキリをより良くさせるんだ？」

「が……贋作だと？」
「あぁ、そうだ。『聖杯の複製』……それがお前の悲願だったな。アダモフ」
「そうだッ！　もう直ぐだ！　もう直ぐで……『聖杯の複製』は完成する!!」
「……くだらない」
興奮気味に喋るアダモフにゾォルゲンは「くだらない」と吐き捨てた。
そして、持っていたステッキを振り上げ、棚に並べてあった黄金の器を叩き割った。粉々になった器の破片がアダモフの足元に散る。
その行為にアダモフは絶句していた。
「な……な……」
「こんな玩具を作っているなら、私の手伝いをしろ」
「ふ、ふざけるなぁ!!　ゾォルゲンッ!!」
アダモフは右手を目の前に出すとこぼれていた水が渦巻き、宙に浮いてアダモフの右手に集まった。そして、その水は槍のような形に変形する。
水の槍を持ったアダモフは矛先をゾォルゲンに向ける。矛先がゾォルゲンの喉元に少し触れ、ゾォルゲンの喉元から血が流れる。
「私の研究を愚弄するかッ!!」
「その研究に意味が無いと言っている」

「本来、聖杯を生み出すには【マキリ】、【アインツベルン】、【遠坂】の三家が揃わないと不可能だ！　だが、私の研究が成功すれば一つの聖杯を作り出せば、あとは無限に聖杯を生み出すことが可能だッ!!」
「だが、その複製した聖杯はまるっきり同じ機能を果たしているのか？」
「っ!?」
痛いところを突かれたのか、アダモフは言葉を詰まらせてしまった。
動揺しているのか、持っていた水の槍も震えているのが分かる。
「貴様が作り出した贋作は本来の聖杯の数十倍の魔力を必要し、願望機としての小聖杯を作り出すこともままならない」
「た、確かに……今の技術では完璧な複製することができないが……ゆくゆくは完璧な複製を……」
「もう一度聞く。その研究に意味があるのか？」
アダモフの言葉を遮るように同じ質問をするゾォルゲン。アダモフは完全に論破されてしまい、言い淀んでしまう。
「黙れ……黙れ……黙れぇぇッ!!」
アダモフは水の槍を振りかぶる。
しかし、ゾォルゲンはステッキを軽快に回し、アダモフの膝の関節にステッキを突き

刺す。バランスを崩したアダモフは水の槍の形状を保てなくなり、そのまま水を被り、地面に倒れ込む。

それをゾォルゲンは冷たい視線で見下ろす。

「イヴァン・ミハイロヴィッチ・アダモフ……貴様をマキリから追放する。破門だ」

「はっ？」

「今すぐ、この工房を破棄しろ」

「ほ……本気で言っているのか？　この私を破門だと？」

「二度は言わん。さっさと失せろ」

「ふざけるなよ……この私が……私の研究が……ここで終るわけには……」

アダモフは正気を失い、虚ろな目で呟く。すると、アダモフの足元が徐々に液体化していく。

「私の悲願は必ず、遂行させる!!　どんな手を使ってもッ!!」

完全に肉体を液状化させたアダモフは部屋の隙間から逃げ去った。

物が散乱している部屋に取り残されたゾォルゲンはため息を漏らしながら、アダモフが座っていた椅子に腰を下ろす。

そして、床に転がっていた丸められた紙を拾い上げ、広げる。

『聖杯の複製』……何が、そこまで貴様を執着させる……イヴァン・ミハイロヴィッ

チ・アダモフ」

――――――――――。

時は1980年代の日本の冬木市
60年に一度、この地で行われる大規模な魔術儀式、聖杯戦争が起きようとしていた。
7人のマスターが、かつてこの地球上で偉業を成し遂げた英雄の影法師、サーヴァントを率いて、最後の1組になるまで、殺し合いをする。
最後の1組になれば、万能の願望器、聖杯が与えられ願いを叶える事ができるという儀式だ。
7人のマスターの内、3人はその聖杯と聖杯戦争の実現化に関わったアインツベルン、間桐、遠坂の三家から選出され、残りの4枠は聖杯が選出した者に与えられる。
7人の魔術師が揃い、聖杯戦争が開始された。
1人、また1人と敗れていき、残りはセイバー陣営の衛宮切嗣。ライダー陣営のウェイバー・ベルベット。バーサーカー陣営の間桐雁夜。アサシン陣営の言峰綺礼。の4人

に絞られた。

いよいよ、第四次聖杯戦争の大詰めを迎える。という所でイレギュラーが発生した。

円蔵山内部の大空洞。

そこに設置された大聖杯に全身、黒いローブで姿を隠した人影が近づいていた。

人影は手に持っていたアタッシュケースとボストンバッグを地面に置くと、それぞれ開いた。アタッシュケースには何も入っておらず、ボストンバッグの方には複数の書物やガラス瓶が詰められていた。人影はボストンバッグの方を漁り、書物やガラス瓶を取り出す。

ガラス瓶は3つあり、赤色、銀色、黒色の三色の液体が入っている。人影は赤い液体のガラス瓶の蓋を開けると液体を垂らし、地面に何かの魔法陣を描き出す。魔法陣が完成すると今度は小さい器を二つバックから取り出し、並べるように置いた。そして、銀色の液体と黒い液体をその器に移す。注ぎ終わると今度は銀の短剣と鏡と宝石を取り出して、魔法陣の中心に置いた。

人影は元の場所に戻ると書物を広げる。

「源は血と銀と銅。理は反転し、黄金と化す。三種の神器は揃い、これを持って儀式とする。写せ。写せ。写せ。写せ。写せ。写せ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされることを待つ。――――告げる。今、ここに我の前に顕現せよ。黄金の杯よ――――！」

詠唱の途中から魔法陣が青い光を発する。脈打つ様に段々と光は強くなり、次第に大聖杯から黄金の光が漏れだす。黄金の光は魔法陣の中心に置かれた銀の短剣と鏡と宝石に集まる。そして、二つの器に注がれていた銀色と黒い液体が飛び出し、黄金の光と混ざり合う。詠唱の最後には目も開けられないほどの光が辺りを照らし、魔力の残滓が風となって吹き荒れる。その風でローブが外れる。人影は中年の男性だった。男性は笑みを浮かべ、持っていた書物を投げ捨てる。光が収まると、そこには大聖杯が存在していた。既に存在していた大聖杯とは別にもう一つの大聖杯が現れた。

「あぁ……素晴らしい……私の研究は間違っていなかった。ついに成功したのだ」

男は涙を流す。一粒の涙が頬に流れ落ちる。男は手を広げると、現れた聖杯が引き寄せられるように男の元に移動する。聖杯を掴むと、そのまま空っぽのアタッシュケースに入れる。

「よし、これで次の段階に移行できる」

「そこで何をしておる」

男が立ち去ろうとすると、いつの間にか男の背後に老人が立っていた。男はアタッシュケース持ちながら老人の方を振り向く。老人は杖を突きながら近づいてきて、その周囲には無数の蟲が羽ばたいていた。

その姿を見て、男は微笑んだ。

「いやー……久しいな」
「貴様は何者じゃ？　それに先ほどの儀式は」
「おや？　数百年生きてボケてしまったか？　ゾォルゲン。……いや、今は間桐臓硯だったか」
　老人。間桐臓硯は顔をしかめながら男の顔を見る。その顔を確認した時、一瞬、驚いたような表情を浮かべた。しかし、また無表情に戻った。
「もしや……貴様はイヴァン・ミハイロヴィッチ・アダモフか」
「数十年……いや、数百年ぶりか」
　アダモフは口元を抑えながら笑みを浮かべていた。
「……と、いうことは今の儀式は」
「そうだ！　私はやり遂げたッ！　『聖杯の複製』を!!」
「それを持って立ち去ることは許さぬ」
　臓硯は杖を地面に強く突くと、臓硯の足元から大量の蟲が湧き出した。そして、蠢きながらアダモフの周囲を囲んだ。
「その老いた姿……水属性ではなく、蟲を使役……随分、地に堕ちたな。ゾォルゲン」
「ほざけ。貴様をここで殺す。やれ」

臓硯の指示で蟲たちが一斉に襲い掛かる。アダモフの裾から液体が飛び出し、アダモフを包むように渦巻く。襲い掛かる蟲は渦巻く液体に遮られ、粉々に潰されていく。波のように押し寄せる蟲の集団をアダモフは顔色を一切変えず、防いでいく。やがて襲い掛かる蟲が尽き果てる。

「そんなモノか、お前の魔術は」

「……イヴァン・ミハイロヴィッチ・アダモフ。貴様の目的は何じゃ?」

「目的? そんなのお前なら分かっているだろ?」

アダモフは持っていたアタッシュケースを臓硯に見せびらかすように目の前に出す。

「『聖杯の複製』。ゾォルゲン、私はそれのみを求めていた。それに私は別にお前の邪魔をしようとは思わない」

「何?」

アダモフの言葉に顔をしかめる臓硯。

「私の要件はもう済んだ。この大聖杯にも興味はない。あとは好きにするが良いさ」

「貴様……何をするつもりだ?」

「さ、私はこれで退散させていただくよ」

アダモフは指を鳴らすと体を液状化させ、地面に潜り込んだ。持っていたアタッシュケースも一緒に液状化させ上手く回収させた。

置き去りとなった臓硯はため息を漏らしながら、大きな岩に座り込んだ。
「儂も貴様も自らの執念によって、この世に生き続けているのか」
アダモフが行っていた儀式の跡と大聖杯を眺めている。
「それによりによって……あの聖杯を複製してしまったのか……いったい、どう転ぶか見物だのぅ……」

――――――――――。

とある廃物置。
複製した聖杯を回収したアダモフは日本での拠点兼工房としている廃物置に戻っていた。
臓硯と対峙していた時は笑みを浮かべていたアダモフだが、今は苛立ちを浮かべていた。聖杯の回収に使用したアタッシュケースを乱暴に蹴り上げる。
「どういうことだッ!!」
アダモフは乱暴に頭を掻きむしりながら回収した聖杯を見つめる。

「複製は完全だったはず！　なのに……なんだ、この聖杯は!!　この聖杯の中身はなんだッ!!」
聖杯の中身を知ったアダモフは取り乱す。
複製した聖杯は何かに汚染されていたのだ。
「これは悪意……？　憎悪の概念か？　くそッ！　私の研究が!!」
物が乱雑に置かれた机からウィスキーのボトルを取ると、ウィスキーを一気飲みした。
ウィスキーを飲み干し、口元に垂れていたウィスキーを拭う。
「ふっ……肉体が水となった私にアルコールは無意味だがな……クソがッ!!」
飲み干したウィスキーの空瓶を壁に投げつけた。空瓶は粉々に砕け散った。砕け散ったガラスに絶望した表情を浮かべるアダモフが映し出される。
「私の研究はここで終るのか……？　まさか既に大聖杯が欠陥品となっていたとは……いや、待てよ」
アダモフはあることが頭を過った。
そして、複製した聖杯を掴んだ。
「もし、聖杯の複製が完璧だったとしたら、この聖杯の中身も複製したということか？この中身は一体なんだ？」

一つの疑問がアダモフを駆り立てる。

「まずは複製した聖杯の中身を解析しなければ……もし……」

アダモフは一つの仮説をたて、笑みを浮かべる。

「もし、この中身が悪意の塊だったら……私は見てみたい。私が作り出した聖杯から……どんな化け物が生まれだすのか……もう直ぐだ……もう直ぐで私自身の聖杯を作り出せる……クククッ……」

新たな研究を始めるアダモフは子供のように目を輝かせながら、一心不乱に紙に殴り書きをする。

それはまるで子供の自由研究のように無邪気に心を躍らせながら、最恐最悪の化け物を作り出そうとしている。

メインストーリー
第一節～２０ＸＸ年　東京～

人理継続保障機関ノウム・カルデア
人類史最後のマスター。藤丸立香は僅かな休息を楽しんでいた。
ベッドに横たわり、携帯端末で動画を流して、視聴していた。
「へぇー……エレキシュガル、ＹｏｕＴｕｂｅ始めたんだ。なんだか胡散臭いけど」
「失礼します、先輩」
ノックと同時に部屋が開き、そこから眼鏡を掛けた少女が入ってきた。彼女の名はマシュ・キリエライト。藤丸立香のサーヴァントであり、頼れる相棒（後輩）である。
マシュの足元には謎の生命体『フォウさん』も尻尾を振りながら立香のベッドにダイブした。
「やぁ、マシュ」
「お休みのところすみません。ココアとお菓子を頂いたので、宜しければご一緒にいかがでしょうか？」
「そうだね……いただこうか」

立香はマシュからココアを貰うと、一口飲む。ココアの温かさと優しい甘みが心に染みる。

ふぅ。と息が漏れる。そして、ベッドでくつろぐフォウの毛並みを優しく撫でる。モフモフの毛並みが心地よい。

「そういえば、先輩は何をご覧になっていたのですか？」

「ん？　……あぁ、ＹｏｕＴｕｂｅだよ」

「ＹｏｕＴｕｂｅ……すみません。勉強不足で、ＹｏｕＴｕｂｅとは何なのでしょうか？」

「そうだなぁ」

マシュに分かりやすく説明するために、頭の中で言葉をかみ砕く。

「インターネットの動画サイトって言えば良いのかな？　誰でも気軽に動画を投稿することができて、色々なジャンルの動画を見ることができるんだ。釣りとかキャンプとか結構、マニアックなモノもあるんだよ」

「なるほど……誰でも投稿できる分、その筋に詳しい方も動画を投稿できるとうことなんですね」

「そうだね」

二人はココアを飲みながら、お菓子をつまみ談笑を進める。

「平和だね」
「そうですね……このような時間が続けばいいのですが……」
「フォウ！　フォウ！」
フォウも専用のお菓子を頬張る。
ウーー。ウーー。ウーー。
突如、警報が鳴り響く。
「ッ!?」
突然の警報に二人は反応し、立香はココアを一気に飲み干した。
「先輩ッ!!」
「まずはブリーフィングルームに行こう!!」
二人は慌てて部屋を飛び出した。

――――――――――。

ブリーフィングルームに着くと、既にスタッフ達が慌ただしく対応していた。

　所長のゴルドルフ・ムジーク。経営顧問のシャーロック・ホームズ。技術顧問のレオナルド・ダ・ヴィンチ。そして、アトラス院出身の錬金術師シオン・エルトナム・ソカリスとそのサーヴァントであるネモが揃っていた。
「すみません！　遅くなりました!!」
「遅いぞ！　まったく何をしているんだ!!」
　立香とマシュが部屋に入るなり、所長のゴルドルフが喝を入れる。
「特異点の位置は!!」
「過去の特異点と類似している波長がないか、比較分析中ですッ!!」
「比較分析、完了です!!　特異点Ｆに５８％類似！　さらに特異点新宿に８９％類似！
　場所は日本です!!」
「日本だとッ!?」
「しかも年代がおかしいです!!」
「説明を簡潔に!!」
「場所は日本の東京、年代が２０ＸＸ年と表示されています!!」
「２０ＸＸ年……どういうことだッ！　技術顧問ッ！」
　戸惑うゴルドルフを他所にダヴィンチは深く考え込む。
「ホームズ……君はどう見る？」

「……まず、白紙になったこの世界で特異点が発生することが、まず気がかりだ。それに２０ＸＸ年……おそらく別の世界線に存在する特異点ではないだろうか？」
「別の世界線の特異点？　どういうことだね!?」
「つまり、白紙にならなかった世界で、さらに未来で発生している可能性があるってことだ」
「そんな所にレイシフトは可能なのかね!?」
「それ自体は問題ないかと」
　ゴルドルフの質問にシオンが答える。
「座標さえ分かればレイシフトすることは可能です」
「よし、それなら話が早い！　藤丸立香！　マシュ・キリエライト！　二人には特異点の修復を命じる！」
「「はい!!」」
「今回は日本。藤丸君にとっても親しみやすい場所だと思うけど、十分に注意してね！」
「ダヴィンチちゃん……了解！」
　立香とマシュはレイシフトの準備に取り掛かる。
「マシュ、いくよ!!」
「はい、マスター!!」

二人はレイシフトで２０ＸＸ年に向かった。

――――――――――――。

２０ＸＸ年。
東京某所。
時刻は深夜３時。
この時間帯でも人が疎らに往来するはずのビジネス街だが、今は人、一人存在せず、静寂に包まれていた。
「やれ！　バーサーカー!!」
「はぁい」
そんな静寂を破るように少女の声がビジネス街に響き渡る。それと同時にビルとビルの隙間から青い炎が燃え広がる。
広範囲で燃え広がる蒼炎の先には少女を抱えながら走る鎧の騎士の姿があった。
抱えられた少女は学校の制服ような服を着ており、銀髪のポニーテールをなびかせて

いた。一方、鎧の騎士は赤いラインが入った鎧に角の生えた兜を身に纏っていた。左手でポニーテールの少女を抱え、右手には赤い剣が握られていた。
「あちっ！　あちちっ！　セイバー！　もうちょい、はよ走らんかい!!」
「うるせぇな!!　舌、噛みたくなかったら喋るな!!」
鎧の騎士は地面を思い切り、踏み込むと空高く跳躍し、ビルの屋上に着地する。
着地と同時に抱えていた少女を放り投げる。少女は「うげっ」と声を漏らしながら尻もちを着く。
「いたた……もうちょい優しく運べんのかい」
「優しく運んでいたら、今頃、丸焼きになってたぞ」
鎧の騎士がさっきまでいた場所を指差すと、そこは既に蒼炎の波が押し寄せていた。
「うわー……えげつなっ。で、これからどうするん？」
「どうするもこうするもねぇ」
鎧の騎士の視線の先には蒼炎でできた大蛇がいた。炎の大蛇はビルを這い上がり、顔を覗かせていた。
そして、その大蛇の頭の上には着物姿の青髪の少女と銀髪の少女が立っていた。二人とも角が生えており、青髪の方は扇子で口元を隠していた。
「えらい派手な攻撃するやん、奈羅花!!」

「そっちこそ、逃げ回っているだけで良いんですか？　樋口先輩」
奈羅花と呼ばれた銀髪の少女はクスクスと笑いながら、ポニーテールの少女。樋口楓を煽る。
その言葉に楓の額に怒りマークが浮き上がる。
「やっぱりシメるか!!」
「そう来なくっちゃな!!」
楓の言葉に鎧の騎士は嬉しそうに持っていた赤い剣を肩に担ぐ。
「立地的にはこっちが優勢。ここで決めるよ、バーサーカー!!」
「ええ、分かってますとも」
青髪の少女が扇子を仰ぐと周囲に蒼炎の火の玉が無数に現れる。扇子を鎧の騎士の方に向けると蒼炎の火の玉が一斉に発射させる。
飛んでくる火の玉を鎧の騎士は剣を振り回りて、弾いていく。飛び散る火の粉が楓に降りそそぐ。
「あっつぅ!!」
「馬鹿ッ!!　離れてろ!」
鎧の騎士は飛んでくる火の玉を払いながら青髪の少女と距離を取る。
「くそっ!!　降りてこい!」

「セイバー相手に接近戦を挑む、お馬鹿がどこにいらっしゃいますか？」
青髪の少女は次に扇子を仰ぐ。すると仰いだ方向から蒼炎の波が押し寄せる。蒼炎の波は鎧の騎士を飲み込む。
しかし、鎧の騎士が剣を振り払い、蒼炎を掻き消した。
「やはり……一筋縄ではいきませんか。なら、これならどうでしょうか？」
今度は扇子を水平に持ち、口元に近づけると、フー。と息を吐く。すると蒼炎が花びらのように舞いながら、鎧の騎士に向かって放たれる。
鎧の騎士はそれを真っ正面から受け止める。
「くっ……さすがバーサーカー。一個一個の攻撃がいちいち重たい」
花びらのように舞っているが実際は灼熱の炎。鎧の騎士は苦悶な声も漏らしながら、振り払う。
しかし、相当なダメージを負ってしまった。
「おらぁ!!」
痺れを切らした鎧の騎士は青髪の少女に向かって、剣を投擲する。
「なっ!?」
思わぬ行動に驚いたのか、青髪の少女は大きな動きで投げつけられた剣を回避する。
そして、青髪の少女の視線は飛んできた剣に向けられる。

それは一瞬の隙だった。しかし、その一瞬を鎧の騎士は見逃さなかった。地面を強く蹴り上げ、跳躍する。一気に青髪の少女との距離を詰めた。

「しま……」

「落ちろッ!!」

鎧の騎士の踵落としが青髪の少女の背中に入る。青髪の少女は成す術もなく、ビルの屋上に墜落する。

墜落した青髪の少女は立ち上がると、着物に付いた汚れを扇子で払い落とした。

鎧の騎士は満足そうにしながら落下した自らの剣をキャッチする。

「なんて野蛮な。それでも騎士ですか?」

「あぁん?　戦いに野蛮も糞もあるか。勝ちゃ良いんだよ」

鎧の騎士は一瞬で青髪の少女に詰め寄る。接近戦となれば鎧の騎士の方が上手だった。

距離を詰めると、持っていた剣を青髪の少女に向かって突き刺す。青髪の少女は扇子で剣を弾き、軌道を変える。だが、鎧の騎士の猛攻は止まらない。

そのまま、膝蹴りを青髪の少女の腹部に喰わらす。直撃した膝蹴りに思わず、口から空気が漏れだす青髪の少女。

「かはっ……ッ!!」

「おら！　さっきまでの威勢はどうしたぁ!!」
相手が怯んでいる隙に今度は剣の柄頭で、後頭部を殴りつける。青髪の少女はたまらず、苦悶な表情を見せる。
そのまま、トドメと言わんばかりの回り蹴りで青髪の少女を吹き飛ばす。青髪の少女は地面にバウンドしながら壁に激突する。
「バーサーカー!!」
「はぁ……はぁ……問題ありませんよ。ますたー」
涙目で心配する奈羅花を安心させるために笑みを浮かべる青髪の少女。
それを見た奈羅花は何かを決意するように真剣な表情に変わった。
「バーサーカー、あれやるよ」
「……えぇ……分かりました。ますたーにお任せします」
奈羅花は右手を掲げると手の甲に刻まれていた紋章。令呪が輝きだす。
「真名開放ッ!!【清姫】!!」
その瞬間、青髪の少女の魔力が増幅された。
清姫。
「安珍清姫伝説」に登場する童女。
熊野詣途中に一夜の宿を求めた美形の僧、安珍に一目惚れ。だが、夜更けに安珍の下

を訪れた清姫は、すげなく拒絶される。それでも安珍は、熊野詣の帰りにまた会おうという約束を交わす。

ところが清姫を恐れた安珍は約束を破り、清姫に会うことなく逃げてしまう。そのことに気付いた清姫は裏切られたことに絶望し、悲嘆し、憤怒し……。

そして竜にその身を変え、彼を追いかけ、追いついた先の寺で鐘に隠れていた安珍を焼き殺した。安珍を焼き殺した清姫は、彼の後を追い入水。自ら命を絶ったと云う。

悲しき運命を背負った童女だ。

清姫は扇子をクルクルと回すと周囲の蒼炎が螺旋のように渦巻いていく。

「真名開放したってことは……宝具かッ!!　マスター!!」

「なら、こっちもやな!」

楓も奈羅花と同じように手の甲に刻まれた令呪を掲げる。

「真名開放ッ!!　【モードレッド】!!」

「あいよ!　マスター!!」

モードレッド。

アーサー王伝説に登場する円卓の騎士の一人、不義の息子にて叛逆の騎士。

父に認められる立派な騎士であろうとしたが、王は後継者としても息子としても彼女を受け入れることを拒否。

モードレッドは裏切られたと絶望し、伝説の通り、カムランの丘にて相討ちになる形で王の槍に倒れた。

モードレッドも同様に魔力が増幅され、頭の兜を取り外す。その姿はキリっとした顔立ちの少女だった。

増幅された魔力を赤い剣――【クラレント】に集める。クラレントから真紅の光が溢れ出す。

一方の清姫も増幅させた魔力を燃料として蒼炎も燃え上らせる。渦巻いていた炎はやがて炎の柱となった。

「いくよ、清姫！　宝具開放ッ!!」

「承りました。宝具開放……」

清姫が静かに唱えると、自らの肉体も炎と化していった。やがて、清姫自身が蒼炎と一つとなり、炎の柱から一体の大蛇が飛び出した。

大蛇は炎のブレスを周囲に放つ。その大蛇は紛れもなく竜だった。

「どうかご照覧あれ！　これより逃げた大嘘つきを退治します。【転身火生三昧（てんしんかしょうざんまい）】ッ!!」

転身火生三昧。

自身を竜に変化させ対象を焼き殺す宝具。

炎の竜となった清姫がモードレッドに襲い掛かる。
モードレッドは清姫の突進をクラレントで受け止めるが、その威力は凄まじく後ろに押されてしまう。踏ん張っている地面は抉られ、みるみる後方に追いやられています。
それに今の清姫は炎そのもの、灼熱が容赦なくモードレッドを焼き殺す。モードレッドの鎧が熱で溶けだしていった。
「くっそ垂れがぁぁぁぁ!!」
モードレッドは気合でクラレントを振り上げ、清姫の突進の軌道をずらす。
清姫は空中で方向展開し、再びモードレッドに襲い掛かる。
「その手は喰らうかよ!!」
再び、クラレントに魔力を束ねる。すると先ほどと同じように真紅の光が溢れ出す。
クラレントを両手で握り、構える。魔力が最大までクラレントに束ねられ、それが漏れだすように周囲に赤い稲妻が走り出す。赤い稲妻は周囲の地面を削りながら、どんどん広がっていく。
「喰らいやがれ!!」
モードレッドがクラレントを振り下ろすと、膨大な魔力が斬撃となって放たれる。その斬撃は真紅の光を放ちながら、赤い稲妻を纏わせる。まるでビームそのものだった。
ビームのような斬撃は清姫に直撃し、青い炎と赤い稲妻が激しくぶつかり合う。その

衝撃で周囲のビルのガラスは粉砕し、看板などは吹き飛んだ。
楓と奈羅花は吹き飛ばされないように必死に地面にしがみ付く。
しばらくぶつかり合っていた青い炎と赤い稲妻だったが、拮抗していたパワーバランスはやがて崩壊していく。清姫の炎が弱まり、モードレッドが放った斬撃が炎の竜となった清姫を貫いた。
清姫は悲鳴を上げながら、元の姿に戻っていく。しかし、その姿は粒子となって消滅していく。
「清姫ッ!!」
「申し訳ございません。ますたー……」
落下していく清姫を優しく受け止める奈羅花。
奈羅花の瞳には大粒の涙が溜まっている。それを見た清姫は微笑みながら、指で涙を拭う。
「どうか泣かないで下さい」
「でも……清姫が……」
「召喚されてから僅かな時間ではありましたが……貴女様と過ごした時間はとても貴重な体験で楽しかったです……」
清姫の下半身はほとんど粒子となって消滅していた。

奈羅花は泣きながら清姫の手を強く握る。
「最期に……これだけは聞かせて下さい……」
「……何？」
「……私が……私がサーヴァントで……貴女様は良かったですか？」
「そんなの……そんなの……良かったに決まっているじゃん!!　清姫は私にとって最高のサーヴァント（友達）だよ!!」
その言葉に嘘偽りは無かった。
嘘に裏切られ、嘘を憎んだ童女。しかし、最後は嘘偽り無い、真実の友情がそこには存在した。
「あぁ……その言葉だけで……私は……私は……救われました……」
清姫は満足そうに微笑みながら完全に消滅した。
「あぁ……清姫……そんな……あぁ……あ……あぁぁぁぁ!!」
泣き崩れる奈羅花の叫びがビルの屋上にこだまする。
それを見ていた楓は心配そうにしながら、奈羅花に近づこうとする。しかし、それをモードレッドに阻止されてしまう。
「行くぞ、マスター」
「でも、モードレッド……奈羅花が可哀想で……」

「いいか？　これは【聖杯戦争】だ。……いや、正しくは【聖杯乱戦】か。勝つ者がいれば負ける者もいる。それが真理だ。情けをかける暇なんちゃないぜ……それに……」

モードレッドも寂しそうな目で泣き崩れる奈羅花を見つめる。

「……それに……一人にさせてやれ」

「……あぁ、そうやな」

楓とモードレッドは邪魔をしないように屋上から出ていった。

ビルの階段を降りている中、楓はボソッと呟いた。

「【聖杯乱戦】かぁ……」

第二節～暗殺者からの奇襲～

２０ＸＸ年。
東京某所。
レイシフト特有の眩き光を抜けると、お馴染みの青い空だった。
立香は「あぁ……またか」と落胆した。
「マスター！　マスター！　着地しますので、掴まってください!!」
「了解」
立香は慣れた手つきでマシュの手を掴み、抱きかかえられる様にしがみ付いた。
「間もなく、着地します！衝撃に備えてください!!」
マシュは立香を抱えたまま、地面に着地する。着地時の衝撃で周囲に土煙が舞い上がる。
「ゲホッ……ゲホッ……ありがとう、マシュ」
「いえ……無事、レイシフトは成功したのでしょうか？」
『もしもーし。聞える？』
モニターからダヴィンチの声が聞えたので、映像を写す。

そこにはブリーフィングルームにたメンバーが映し出されていた。
『バイタル安定……。座標確認……。うん、まずは無事、レイシフトできたみたいだね。藤丸君、そこは君の知っている東京かい？』
「そうですね……見た感じ、テレビで見たような光景と一緒ですね……でも……」
『でも。とは何だね』
割り込んできたゴルドルフが問いかける。
「人が見当たりません」
『何？』
「人一人いないんです」
『ダヴィンチ。周囲に人除けの結界か何かが貼られていないか確認を』
ホームズの指示で直ぐ確認するダヴィンチ。確認が済んだダヴィンチは驚いた表情をしていた。
『これは凄い。東京全域に結界が貼られている』
「ええっ!?」
「そんなことが可能なのですか？」
『おそらく、何かしらの儀式の途中かもしれない。だが、これは好都合だ。内側に潜り込めたのだ探索のしがいはある』

「た、確かに……よし、マシュ。ここは何か手掛かりがあるかもしれないから、探索しよう」
「そうですね、マスター」
『ホームズ!!　勝手に意見を出されても困る！　…………ごほん！　藤丸立香！　マシュ・キリエライト！　直ちに周辺捜査を行い、特異点修復の手掛かりを見つけるのだ！　何かあればすぐに報告だ！』
「「了解しました!!」」

――――――。

「むっ」
「どうしました?」
高層マンションの屋上で二人の人影があった。
1人は制服姿に紫がかったショートの髪の少女。もう一人は赤い服を着た銀髪の男だった。少女は本を読み、赤い男は周囲を警戒するように遠くを見渡していた。

「突如、上空からサーヴァントとマスターと思われる二人組が現れた」
「何ですか、それ」
　赤い男の話に食いつく少女は本を閉じて、赤い男に近づく。男の方は一瞬、嫌そうな顔をしたがすぐに話を戻す。
「7時の方角。ここから3ｋｍ先に落下した。どうする、マスター」
「そうですね……気になりますし、行ってみますか。あ、私は面倒なので連れていってくださいね」
　少女は両手を広げて抱っこのアピールをした。それを見た赤い男は再び、嫌な顔を浮かべながらため息を漏らす。
「さ、行きますよ。アーチャー」
「全く……了解だ。マスター」
　赤い男は少女をお姫様抱っこすると屋上から飛び降りた。

――――――――。

周辺を探索していた立香とマシュは大通りに向かった。
本来なら車や人々が往来しているのであろう、広々とした通りだが今は車もおろか人の姿もなかった。
「いやー、東京に人がいないっていうのも新鮮だね」
「そうなんですか？」
「そうだね……日本の人口の約3分の1が集まっているからね」
「このような狭い地域でそんなにも……それなら、この大通りも人で賑わっているわけなんですね」
「そうなんだけどね」
立香はふと視線を並んである店の方に向ける。そこはレディース服の店のようで華やかなワンピースなどを着たマネキンが陳列されていた。
するとガラスに反射して、立香達とは反対側の方で何かが動いたように見えた。
「っ!!」
立香は慌てて、何かが動いた方を向く。
そこには何もなかった。
「マスター？」
「マシュ……周囲に魔力の反応はある？」

「ッ!?」

立香の意図を読み取ったマシュに緊張が走る。背負っていた巨大な盾を構える。

「いいえ……魔力反応はありません。ですが、気配遮断などで姿を隠している可能性もあります。注意してください」

二人に緊張が走る。

次の瞬間、何か風を切るような音が近づいてきた。その音にいち早く気が付いたマシュが盾で払いのける。

音の正体は飛んできたクナイだった。

「クナイ……ってことはやっぱりアサシン!!」

「あれー……上手く隠れたつもりだったのになぁ……」

物陰から人影が出てきた。

赤いマフラーを首にかけ、男性とも女性とも取れる中性的な顔つきだった。

スコップを引きずりながら立香達に近づいてくる。

「君たちライバーじゃないよね?」

「ライバー……?」

「ここら辺は人除けの結界?で、ライバー以外は近づけないはず。って運営さんが言っていたのになぁ」

赤いマフラーの子は頭を掻きながら独り言をつぶやく。
明らかに一人だが、さっきの攻撃はこの子がしたのではない。と立香とマシュは確信していた。おそらくサーヴァントが潜んでいる可能性がある。
マシュは盾を構え続け、立香は警戒しながらマフラーの子に近づく。
「僕たちは怪しい人間じゃないんだ。実は迷ってしまって……」
「えぇー、もの凄く怪しんだけど……それに……そこの盾を持ている子はサーヴァントでしょ？」
「サーヴァントを知っている……マスター。やはり、あの方も」
「うん。マスターみたい……どこかにサーヴァントがいるはずだ」
サーヴァントの存在を知っていたマフラーの子に対して、聞えない声量で話す立香とマシュ。
「うーん……怪しいっちゃ怪しいけどな……どうする？　アサシン？」
「……」
「おーい、アサシン？」
「……」
「アサシン？」
「……はぁ……マスター……」

マフラーの子の背後から仮面をかぶった女性が現れた。
「私達はアサシン。基本、闇討ち・不意打ち・奇襲を得意とします。向こうもアサシンだと感づいていたようですが、こちらから暴露する必要はありません」
「別にいいじゃん……正体がバレたって勝てば良いんでしょ？」
「っ!?」
マフラーの子の目つきに立香は寒気を感じた。
殺気にも取れる不気味な視線だった。
「あれは百貌のハサンさん!!」
「あれ？　真名までバレてる？」
「……どうやら、敵も優れた情報網を持っているようですね。マスター、命令を」
「そうだね……もちろん……殺ろうか」
マフラーの子は右手の甲を掲げ、令呪を見せた。
「真名開放……【百貌のハサン】……」
「はっ!!」
百貌のハサン
暗殺教団の教主『山の翁』を務めた1人で、百貌のハサンの異名をとる暗殺者。
特技である多種多様な転身ぶりを駆使し、場面場面で必要なスキルを持つ性格となっ

て仕事を完遂してきた。
　同一人物とは思えぬほど多彩な能力を誇り、老若男女、ありとあらゆる変装もこなすため、真の実態は側近すらも掴めなかった程である。
　その正体は多重人格者。
「バレてるようなら自己紹介しないとね。僕はましろ。それで相方であるサーヴァントは……」
「ハサン・サッバーハが一人。百貌のハサン。いざ、その命、貰い受ける!!」
　百貌のハサンは一瞬で立香との距離を詰める。そして、手に持っていたクナイを振りかざす。
　しかし、その攻撃はマシュの盾によって、防がれてしまう。盾とクナイがぶつかり合い、火花が散る。
　百貌のハサンはバックステップで距離を取ると、再び、マシュを無視して立香に襲い掛かる。
　マシュが立香と百貌のハサンの間に割り込むように入り、盾を構えるが、百貌のハサンの姿が変貌していた。先ほどまでは長身で細身の女性だったが、筋肉隆々の大柄の男にすがたを変えていた。
　筋肉隆々の百貌のハサンがその巨大な腕を振り上げる。

「しまった!!」
マシュは盾で百貌のハサンの打撃を受け止めるが、凄まじい威力のため吹き飛ばされてしまう。
吹き飛ばされたマシュは先ほどのレディース服の店のガラスを突き破り、マネキンを巻き込んで倒れ込んだ。
「マシュッ!!」
「よそ見をしている場合か?」
百貌のハサンは今度は細身の男性と姿を変えていた。ムエタイのようなスタイルで構えると、立香に向けって蹴りを放つ。
鍛えられた鋼のように固い足から放たれる蹴りはまるで砲弾のような凄まじい破壊力で、立香は吹き飛ばされてしまう。うまく受け身を取ろうとするが、受け身に失敗してポールに叩きつけられる。
「ぐはっ……」
「マ、マスター!!」
吹き飛ばされたマシュは慌てて立ち上がり、立香に駆け寄る。立香はあばら骨が何本か折れており、立ち上がれる状態ではなかった。
百貌のハサンは再び、長身の女性に戻っていた。

「アサシンだからと舐めてもらっては困る。私達は百貌のハサン。その名の通り百個の人格を持っており、接近戦に優れた人格も存在する。貴様らに勝ち目はない」
クナイを取り出し、振り上げる百貌のハサン。
マシュは立香を庇うように覆いかぶさる。百貌のハサンがクナイを振り下ろす。
その瞬間、彼方から赤い一閃が飛んできて、百貌のハサンの腕を吹き飛ばした。
吹き飛ばされた腕とクナイが無造作に転げ落ちる。
「ぐわぁぁ!!」
「アサシンッ!!　今のは狙撃ッ!?　アーチャーか!!」
ましろは飛んできた方向を見るが、目視では確認することが出来なかった。
「……分が悪いか?　どうする、アサシン?」
「いえ……不覚を取られましたが問題ありません。漁夫の利を狙うアーチャーと目の前の敵を一気に叩きます。マスター、宝具の許可を」
「あー……確かにアサシンの宝具なら可能か。いいよ」
ましろの令呪が輝きだす。
「宝具開放……殺れ、アサシン」
「かしこまりました。宝具開放!　我ら群にして個、個にして群、百の貌持つ千変万化の影が群……いざ妄想幻像(ザバーニーヤ)!!」

百貌のハサンが宝具を唱えるとましろのと百貌のハサンの周辺に似たような姿をした複数の人影が現れた。
「これこそが我が最強の技……妄想幻像。我らの攻撃を避けきれるか?」
無数に増えた百貌のハサンがマシュと立香に襲い掛かる。
「詰めが甘いな。アサシン」
マシュ達の目の前に突如、赤い服の男が現れた。
そして、握られていた白黒の双剣で襲い掛かってくる百貌のハサンを薙ぎ払うように切り裂く。その攻撃により、大半の百貌のハサンが消滅した。
「な、何ッ!?」
「おや? 大半は消したつもりだが……まだ残っているということは全て倒さないと駄目なようだな」
「その声は……」
立香に覆いかぶさっていたマシュが顔を上げると赤い服の男と目が合った。
「エミヤ先輩……?」
「ん? すまないが、私は君達を知らない。もしかしたら……過去に私を召喚したことでも?」
「あ、いえ……何といったら良いか……」

「おっと、おしゃべりは後だ。まずは目の前の敵から排除だ」
エミヤ
とある未来において、正義の味方を目指したとある青年が辿り着いた成れの果ての一つ。
エミヤは双剣を構え、百貌のハサン達を睨みつける。
睨まれた百貌のハサン達はエミヤに恐れたのか一歩、後ろへ下がる。
「さっきのアーチャーか……てか、このサーヴァント見覚えが……」
「マスター……命令を……」
「うーん……やれそう？」
「命令であれば」
「よしっ。なら、頑張れ」
「かしこまりました」
長身の女性の百貌のハサンが指を鳴らすと他の百貌のハサンが一斉にクナイを構えた。
「我らの最大の攻撃は数だ。数で押し通せ！」
クナイを持った百貌のハサン達が一斉にエミヤに襲い掛かる。
エミヤは持っていた双剣を百貌のハサン達に向けって投擲する。二つの双剣は回転

して、次々と百貌のハサン達を切り裂く。
「馬鹿が！　武器を捨てたか!!」
1人の百貌のハサンがクナイを振り上げる。
「投影開始（トレース・オン）」
エミヤが呟くとさっき投げた双剣と全く同じ剣が手元に現れた。
そして、そのままカウンターで百貌のハサンを切り裂く。
「何ッ!?」
「いくら数で襲い掛かろうと無駄だ」
エミヤは再び、双剣を投擲すると今度は先に投げた双剣が引き寄せられるように戻ってきた。投擲した双剣と戻ってきた双剣。計4本の剣で百貌のハサンを切り裂く。
そして、戻ってきた双剣をキャッチすると、その剣でクナイと受け止め、蹴りつける。襲い掛かってくるクナイをいとも簡単に受け止め、回避する。
エミヤは一切、ダメージを負っていなかった。
「つ、強い」
エミヤの強さに驚愕するマシュ。
気絶していた立香も目を覚まし、身体を起こそうとするが体に激痛が走る。
「マ、マシュ……くっ!?」

「マスター！　起きちゃダメです！　骨が何本か折れています」
「だ、大丈夫……戦っているのはエミヤ？」
「はい。私たちを助けてくれています。ですが……敵の数が多いです」
「……マシュ、僕は大丈夫だからエミヤの援護を」
「ですが！」
「大丈夫だから」
立香の真っ直ぐな瞳にマシュは押し負けてしまい、ため息を漏らす。
「分かりました。マスターはここで安静にしてください」
マシュは盾を持ってエミヤの元に駆け寄った。
そして、そのまま複数の百貌のハサンを盾で薙ぎ払う。
「援護します」
「……承知した」
マシュはエミヤの背後を守るように盾を構え、背を向けるように立った。
百貌のハサン達の攻撃をマシュが防ぎ、エミヤが反撃する。
マシュは盾で防ぎつつ、そのまま盾で叩きつけたり薙ぎ払って、百貌のハサンを倒していく。一方、エミヤはクナイを双剣で受け止めたり、紙一重で回避しつつ、双剣で切り裂く。

そうしていく内の百貌のハサンの数も減ってきていた。
「くっ……強い」
「どうする？　ここは大人しく引き下がるかい？」
「……攻め切れないのは私の責任です。ここで命を捨ててでも倒せ。というのでこの命に代えても」
「そういうのは良いよ。自分の命を粗末にするヤツは嫌いだし。……じゃ、ここは逃げるか」
ましろが手を叩くと長身の女性の百貌のハサンが近づき、ましろを抱きかかえた。
「貴様らはマスターを逃がすための盾となれ」
長身の女性の百貌のハサンが他の百貌のハサンに命令すると抱えたましろと共に一瞬で姿を消した。
命令のせいか残った百貌のハサン達の攻撃が激しくなる。
筋肉隆々の百貌のハサンが巨大な腕を振り回す。マシュが盾を両手で持って、全力で受け止める。百貌のハサンの打撃が強烈で、全力で受け止めたはずのマシュがじりじりと後ろへ押される。
しかし、負けじとマシュは巨大な腕を押し返し、隙ができた腹部に盾を叩きこむ。
「逃がすか」

「エミヤ先輩！　とにかく目の前の敵を倒しましょう」
「くっ」
エミヤの真似か一人の百貌のハサンが二本をクナイを持って、乱撃を繰り出す。エミヤも対抗するように双剣をぶつける。クナイと双剣がぶつかる度に火花が散る。
エミヤがクナイを弾き、隙ができたとこを見逃さず、そのまま百貌のハサンを真上から切り裂く。
マシュは盾を構えたまま突進する。盾の突進により、百貌のハサン達が吹き飛ぶ。
残りはあと僅か。
エミヤが三組目の双剣を作り出し、計6本の剣を巧みに使いこなし、残りの百貌のハサンを倒し切った。
「ふう……これで全部か」
「マスター!!」
百貌のハサンとの戦闘が終わり、マシュは立香の元へ慌てて駆け寄る。
「お疲れ様、マシュ」
「まずはマスターの治療を!!」
「それなら」
立香を心配するマシュの元にエミヤが近寄ると、ビルの間の薄暗い裏路地の方を見つ

める。

そこから制服姿に紫がかったショートの髪の少女が出てきた。

「戦闘は終わりましたか？」

「あぁ、だが、敵を倒しきれなかった」

「いえ、このお二人が無事なら構いません……と、言いたいところですがマスターさんの方は重症ですね」

少女は立香の全身を見渡す。立香はボロボロで一人で立ち上がることが不可能だった。

「確か事務所に健屋さんがいたと思うので、そこで治療してもらいましょう。アーチャー、彼を事務所まで運んであげてください」

「……了解した」

エミヤは少々、不満そうにしながらも立香を背負った。

「あ、あの……貴女は？」

「え？　あぁ、そうでしたね。自己紹介がまだでしたね。私の名前は静凛。それでこっちは……」

「私のことは知っているようだ」

「あ、そうなんですね」

凛は興味なさそうに答えると方向を変えて、歩き出した。
「では、事務所まで案内しますね」
「じ、事務所ですか？」
「ええ、私たち『にじさんじ』の事務所です」

第三節～吸血少女のゲリラライブ～

凛に案内され、マシュと負傷した立香はオフィス街を歩いていた。負傷した立香はエミヤに背負われていた。

「さぁ、こちらですよ」

先頭を歩く凛が立ち止まると、そこはただのオフィスビルだった。凛はそのまま自動ドアをくぐり、入っていく。立香を背負ったエミヤも後に続くように入っていき、マシュも恐る恐る入っていく。

すると、ロビーには男女の二組が楽しそうに談笑していた。

「あれ？　凛先輩」

「あー、お疲れ様です」

女の方は和服姿に獣耳。男の方は軍服のような服を身にまとい、長い髪を一つにまとめていた。腰には刀が差してあった。

「おや？　フミさんに、長尾さん。どうも」

凛は和服の女をフミ、軍服の男を長尾と呼んだ。

にじさんじライバーのフミと長尾景だ。二人は『フ景罪』としてコラボを行っている。

「健屋さんっています？」
「確か……スタジオで収録してたかと……」
「ってか、その人たちは」
　長尾が立香を覗くように見つめる。
「あー……今回のイベントの参加者？　です」
「へぇー、【聖杯乱戦】の参加者ですか」
「ん？　【聖杯乱戦】ってライバー限定ですよね？　その人、ライバーじゃないっすよね？」
「いんや、長尾。あの後ろの子はサーヴァントじゃね？」
　フミがマシュの方を指差すと、長尾の方もつられて見る。
「へぇー、区別つかないっすね。ってことは戦えるってことっすか？」
「まぁ……そうなんですけど。先に治療させてあげないと」
　長尾は不敵な笑みを浮かべると、腰に差していた刀に手を置く。それを見た凛は静止させるように言葉を遮る。
「そうっすね」
　残念そうに刀から手を放す、長尾。それを見ていたフミは呆れていた。
「では、その子が回復したら挨拶に伺いますので。さ、行くぞ。長尾！」

「りょ、了解っす!!」
フミがマシュ達に手を振ると長尾を連れて、外に出ていった。
「……嵐のように去っていきましたね。それに普通の人には見えませんでした」
「あー……そこら辺の説明も後で。先に収録スタジオに向かいましょう」
凛はフミが言っていたスタジオに向かう。
スタジオの部屋の前に着くと、ノックをして室内に入る。そこには修道服を着た少女と、金髪で派手な格好をした少女、そしてナース服を見た少女の三人が談笑してた。
「失礼しますね」
「あ、凛センパイ！　ちわーっす!!」
「あぁー!!　こんにちは！」
「お疲れ様です」
三人は各々、凛に挨拶をした。
「健屋さん、収録中に申しわないんですが……この人の治療をお願いします」
健屋と呼ばれたナースが立香を見ると、慌てて立ち上がった。
「怪我人ですか!!　見ます！」
エミヤが立香を下ろして、寝かせると健屋は立香の方に駆け寄り、身体を触る。
「……骨折してますね。幸い、命に別状は無いようです」

「そ、そうですか……良かった。先輩」
マシュは安堵して、いつもの呼び方に戻ってしまっていた。
「ですが、念のために……【ナイチンゲール】さん」
「治療ですね」
健屋の隣にいつの間にか軍服を着た女性が立っていた。
ナイチンゲール
奉仕と献身を信条とするクリミアの天使、フローレンス・ナイチンゲール。
絶対に挫けることなく、誰であろうと――たとえ大英帝国の君主であろうとも、告げるべき言葉を告げる強靱な精神を有している。
異名は「小陸軍省」。たったひとりの軍隊とでも言うべき不屈性の持ち主である。
ナイチンゲールは立香を観察すると、腰のポーチから無数の注射器とメスを取り出した。
「まずは殺菌ですね」
「ちょっ!?　ナイチンゲールさん!　ストップ!!　手術はいいのでスキルを使ってください!!」
不穏な動きをするナイチンゲールを静止させる。
ナイチンゲールは動きを止めると、先ほど出していた注射器やメスをしまった。そし

て、立香に触れると淡い光が立香を包み込んだ。
ナイチンゲールのスキル『鋼の看護』。
魔力で形成されたメスや薬品を使用して仲間の治療を行う。人を救う逸話により強化されているため、重症でも治療可能。
ナイチンゲールのスキルにより、立香の怪我は一瞬で治癒され、立香は目を覚まして起き上がった。
「あれ？　ここは……」
「目が覚めましたか！　先輩!!」
「マシュ……僕、気絶していたみたい……エミヤに運ばれている所までは覚えているんだけど」
「実は……こちらの方々が助けてくれたのです」
マシュは凛や健屋の方を振り向くと、お辞儀をした。
立香の２人にお辞儀をした。
「そうだったんだ……助けてくれてありがとうございます」
「良いですよ。私としても、あのまま見過ごすわけにはいきませんでしたから」
「私もです。医療関係者として助ける義務がありますから」
「……それで……質問なのですが……どうして、サーヴァントであるエミヤやナイ

チンゲールがここに」
「サーヴァントはそれだけじゃないですよー!!」
立香の質問を遮るように金髪の女の子が手を上げた。
「せっかくだから紹介しちゃおうか！　私の名前は星川サラ。それで私のサーヴァントは……【清少納言】!!」
「へいへーい！　呼んだー!!」
金髪の女の子。星川サラの横に派手な髪形の少女が現れた。
清少納言
村上天皇の命で結成された文化人グループで、『万葉集』の訓読などに関わった「梨壺の五人」が一人、清原元輔の娘。
男性中心の平安時代において、その型破りな行動力で己の才覚を世に示した女傑。
一条天皇の皇后・中宮定子に生涯を通して仕え、最後の時までその傍を離れることはなかった。主に捧げられた散文の数々は、後に『枕草子』として集成されることになる。
現在は絶賛パリピ中である。
「では、私もですかね。私はシスタークレアと申します。それで……」
「そう言うと思い、準備はしてありますよ。マスター」
「ありがとうございます。天草さん」

修道服を着た少女の隣に神父の格好を着た男が現れた。
「初めまして。サーヴァント。ルーラー【天草四郎時貞】です」
天草四郎時貞
江戸時代初期に起きた一揆「島原の乱」で指導者を務めた少年。
とある惨劇にあって彼は抱いた怒りや悲しみを全て捨て去り、「万人が善性であり、万人が幸福である世界。あらゆる悪が駆逐された『この世全ての善』を手に入れる」という野望を抱く。
「人類全ての救済」。それが天草四郎時貞の最終目標である。
「では、改めまして。健屋花那って言います。そして、私のサーヴァント、ナイチンゲールさんです」
「エミヤに……ナイチンゲール……清少納言……それに天草……ってことは全員がマスター？」
「それについてだが」
エミヤが手を上げて発言をする。
「どうやら互いの情報を交換した方が良いようだ。彼と、そこの盾のサーヴァントは【聖杯乱戦】のシステムを理解していないらしい」
「そうですね……ここは話し合いましょうか。では、あそこに行きましょうか」

「あそこ……？」

立ち上がる凛を横目に立香が首をかしげる。

「はい。この【聖杯乱戦】のゲームマスターの所です」

――――――――――。

立香とマシュは凛や他のライバーに連れられ、にじさんじの事務所から徒歩５分にある、とある喫茶店を訪れていた。

喫茶店のドアには『ＣＬＡＵＳＥ』の看板が掛けてあったが凛は気にせず、そのまま入っていった。

「いらっしゃい」

カウンターで青い髪の中年男性がグラスを丁寧に磨いていた。

男性はスーツをキッチリ着こなし、眼鏡を掛けていた。

「お邪魔します」

「おや？　凛さんに、サラちゃんに、シスタークレアさん………おっと、見ない顔がい

るということはイレギュラーだね」
「話が早くて助かります」
「あ、マスター！　私、クリームソーダ飲みたいです！」
　星川が席に座ると、勢いよく手を上げた。
「かしこまりました。他の方々は？」
「では、私は紅茶を。クレアさんと健屋は？」
「私も紅茶を頂きます。藤丸さんとマシュさんはどうしますか？」
「私も紅茶で!!」
「あ、えー……アイスコーヒーで」
「わ、私も紅茶をください」
「では、準備しますね」
　マスターはお辞儀をすると棚からティーカップを取り出して、準備を始めた。
「あの……静さん」
「はい？　それと凛でもいいですよ」
「で、では凛さん……あの方がゲームマスターなんですか？」
「はい。今回の【聖杯乱戦】のゲームマスターであり、立案者の間桐奈切（まとうなきり）さんです」
　凛が間桐奈切と呼ばれた男を紹介するとマスター改めて、奈切がお辞儀をした。

「お初にお目にかかります。この【聖杯乱戦】のゲームマスターである間桐奈切と申します。よろしくお願いいたします」
「いえ……こちらこそ」
「お待たせいたしました。クリームソーダ、紅茶、アイスコーヒーです。ご一緒に自家製のクッキーもどうぞ」
「わー！　いただきます!!」
　星川は真っ先にクッキーを手に取り、一口かじる。シスタークレアとマシュもクッキーを食べる。
　優しい甘みが口いっぱいに広がった。
「お、美味しいです」
「でしょー！　分かってるぅ、マシュちゃん」
「……それで、凛さん。こちらの方々は？」
「あ、そうでした。こちらは藤丸立香さんとマシュさん。マシュさんは……」
「サーヴァントですね。それに……セイバーでもアーチャーでもない。エクストラクラスのようですね」
　奈切はマシュの正体を見ただけで暴き、立香とマシュは驚いていた。
「見ただけで分かるんですか？」

「私も長く魔術師をしていますからね……ですが、彼らはライバーではないようですね。運営からの通達もありませんし、私も登録した記憶がございません」
「そうですね……藤丸さん。貴方達のことをお聞きしても良いですか？」
「……そうですね。お話しします」
『ちょっと、待ったぁー!!』
　立香が説明しようとした瞬間、モニターからダヴィンチが映し出された。
「うわぁ!!　ダ、ダヴィンチちゃん!?」
『やっと繋がったよー!!　大丈夫かい、藤丸君』
「は、はい。何とか……」
『そうか、良かった良かった！　音声は聞えていたから事情は大体、把握している。これまでのことを話してもオッケーだよ』
「分かりました」
　立香は今までのことを全て話した。
　複数の特異点を回ったこと。自分たちの世界が白紙になり、自分たちの世界を取り戻すため、異聞帯を回っていること。
　そして、どうして自分たちがこの特異点にやってきたのか。全てを話した。
　その間、凛や星川たちは黙って話を聞いた。

「――――以上。これが僕たちの現状です」
「特異点に、異聞帯ですか……どう考えます？　マスター」
「そうですね……特異点の原因を解明させたいのでしょうが……申し訳ございませんが、そちらの関しましてはお力沿いすることができません」
「っ!?　どうしてですか!!」
「第一にその特異点の原因がこの【聖杯乱戦】なのか、確証がありません。それに先ほども仰いましたが、この【聖杯乱戦】を開催しているのは私です。私が望んで、この【聖杯乱戦】を開催しているからです。そして、この【聖杯乱戦】は勝者が決まるまで終わりません」
『それは貴方の意志かい？』
「いいえ、そういう儀式だからです」
『……』
「……」
　ダヴィンチと奈切は互いの間合いを図るように沈黙する。
『少しいいかい？』
　沈黙を破るようにモニターの先にいるホームズが手を上げる。
「あれ？　ホームズさん？」

モニターに映ったホームズに反応する星川。
『おや？　私のことを知っているのかい？』
「知っているも何も……昨日、シェリンさんが負けたからホームズさん消えたはずじゃ？」
『私が【聖杯乱戦】に参加していた？』
「え？　そうですよね」
「そういえば、そこら辺の説明をしていませんでしたね」
奈切はポンと手を叩いた。
『質問したいことがあったが、先に【聖杯乱戦】のシステムを聞こうではないか』
「そうですね……では、こちらから条件を提示させていただきます」
『条件……？』
「ええ、藤丸立香さん、マシュ・キリエライトさんの【聖杯乱戦】の参加です。そして、ルールは教えますがシステムに関しましては【聖杯乱戦】で勝ち続けたらお教えしましょう」
「【聖杯乱戦】に参加?!」
「私たちがですか？」
「ええ、そうです。貴方達の参加を希望いたします。理由はそうですね……面白そうだ

から。ではダメですか？」
『……どうする、ホームズ』
『どちらにしろ【聖杯乱戦】が原因か調べるには参加するしかあるまい』
『……はぁ……そうだね。私たちは参加することを認めるが、藤丸君。君はどうする？』
「この特異点を修復させるのに必要であるのならば参加します！」
「素晴らしい」
　立香の返答に拍手をする奈切。
「では、登録と通達は私の方で処理しておきます。では、【聖杯乱戦】のルールを説明いたします。まず、この【聖杯乱戦】はにじさんじのイベントとして行っております」
「イベント？」
「えぇ、そうです」
　立香の疑問い答える凛。
「マスターがイベントとして、にじさんじの運営が許諾し、行っています。もちろん安全管理なども徹底しています……と、言いたいところですがさっきの戦闘のように本気で戦っているライバーもいますので、どうしても負傷者は出てしまっています」
「ちなみに、ライバー全員が参加しているんですか？」

「そうですね」
「ライバーって何人くらい所属しているんですか？」
「今って何人でしたっけ？」
「この前、エデン組の６人が入ってきましたね。ちゃんとは数えてませんがざっと１００人は超えてますね」
「１００人!?」

　現実離れした数字に驚愕するカルデアメンバー。
『つまり１００体のサーヴァントが召喚されているってことかい？　儀式にしては大規模すぎる。それに聖杯で魔力のリソースが足りるとは到底、思えない』
「そこは企業秘密で」
『ぐぐぐっ』
「おっと、続きを。そして、その１００人のライバーとサーヴァントで１人の勝者を決める。そして、最後の１人になった方のどんな願いも叶えることができます」
『そこは聖杯そのものシステムと変わりないのか……』
「そして、さきほどのホームズさんの件ですが……本来、サーヴァントは座から召喚されますが、今回の【聖杯乱戦】で召喚されるサーヴァントは座からコピーしたサーヴァン

トであります」
「座からコピーしたサーヴァント……つまり本物ではないっていこと」
「本物か偽物か。と言われると難しいところですね。意思や記憶はありますし、サーヴァントとしてのステータスも変動していません。平たく言えば、シャーロックホームズは座または他の場所で召喚されていても、ここでは別のシャーロックホームズを召喚することが可能。ということです」
「うん？　うーん……」
「そこまで深く考えないでください。そして、戦闘のルールですが……一つ、マスターを殺してはいけません。二つ、深夜０時～３時までの間にランダムに戦う相手が発表されます。その相手とは必ず戦闘を行ってください。三つ、それ以外の戦闘も許可します。以上が大まかなルールです」
「それだけですか？」
「ええ、変にルールを凝っても仕方ないですからね」
　ルールを聞いた立香は深く考え込みながら、コーヒーを一口飲む。
「……分かりました。ルールについては問題ありません」
「では……マスター、藤丸立香。サーヴァント、マシュ・キリエライトの参加を許可します」

「へぇー……そいつと戦っていいんすか？」

突然、店のドアの方から声が聞えた。
皆、一斉に声が聞えた方を振り向くと、そこには銀髪で赤い瞳の青年と髪を後ろで結び、カーディガンを羽織る青年が立っていた。
「おや？　葛葉さん、叶さん」
「どうも。お邪魔してます」
凛が声を掛けると叶と呼ばれたカーディガンの青年が手を振った。
銀髪で赤い瞳の青年は葛葉。カーディガンの青年は叶。どちらもにじさんじのライバーだ。
「そこのマスター!!」
葛葉が立香に指を指す。
向けられた立香はきょとんとしていた。
「ぼ、僕ですか」

「やい、この俺と戦え!!」
「えぇー!!」
　突然の宣戦布告に驚く、立香とマシュ。
　他のライバー達は呆れたような顔をしていた。
「と、突然、何ですか!?」
「どれぐらい強いのか試したくってよぉ！　拒否権はないぜ！」
　葛葉が令呪を掲げると、葛葉の目の前にピンクのアイドル風衣装を着た少女が現れた。
　少女は角と尻尾が生えており、黒い槍を持っていた。
「何？　ライブ？」
「ちげぇよ！　バトルだ、ランサー!!」
「えぇー！　ちょっと子豚ァ！　ライブ以外は呼ばないでって言ったでしょ！　それでも私のマネージャー!!」
「うるせぇ！　何がライブだ！　それに俺はお前のマネージャーじゃなければ、子豚でもない!!　いいから戦うぞ」
「はぁ……これだから使えないマネージャーは。良いわ、私の可憐で美しい戦いを見てなさい!!」

葛葉と少女は何か言い争っていたが、少女の方もノリノリで戦おうとしていた。
「えぇ……どうしよう、マシュ」
「相手はエリザベートさんです……話は聞いてくれないかと」
葛葉のサーヴァントは【エリザベート・バートリー】
「血の伯爵夫人」と言われたエリザベート・バートリ。
結婚当初から使用人に暴虐を働くことがあり、サディスティックな人物だった。夫婦仲は円満であったが、程なくして夫と死別。
このころから彼女の狂気は本格化し、己の美を保つため、多くの少女を初めとする領民を拷問し虐殺するようになる。
「さぁ、ライブの開催よ」
エリザベートは軽快に槍は回しながら決めポーズを取る。
そして、一瞬でマシュとの距離を詰めた。そして、そのまま槍も振り上げる。
「っ!?」
マシュ咄嗟に盾を展開させ、振り下ろされた槍を受け止める。しかし、エリザベートはそのまま力任せに槍を振り、マシュを入口まで吹き飛ばした。
マシュは何とか着地して、体勢を整えた。
「マシュッ!!」

「店は壊さないでくださいね」
「大丈夫です。もしもの時は私たちで守りますから。そうでしょ、アーチャー」
　凛がそういうと隣にエミヤが現れた。
　そして、エミヤ以外にもナイチンゲール、天草四郎、清少納言も現れていた。
「分かっているさ」
「すみません、お騒がせして」
　葛葉と一緒にいた叶は皆に謝りながら椅子に座り、クッキーを手に取った。
「葛葉のヤツ、さっきの話を盗み聞きした瞬間に笑みを浮かべたから、何を企んでいるかと思えば……」
　叶は慌てて飛び出した立香を見つめながらクッキーを齧った。

――――――――――。

　喫茶店の外ではマシュとエリザベートが戦闘を繰り広げていた。
　エリザベートはまるでダンスを踊るかのような華麗なステップで槍を操る。マシュ

はただ盾で受け止めるしか出来なかった。
エリザベートの猛攻により、マシュは攻撃する暇が無かった。
「くっ……攻め手が」
「さぁ！　踊りなさい!!」
エリザベートは右側から槍を振り回す。マシュは盾で受け止め、バックステップで距離を取ろうとするが、エリザベートはすかさず詰め寄り今度は左側から槍を振るう。
マシュは焦りながら盾を槍に叩きつけて、攻撃を弾く。その行動を見透かしたようにエリザベートの尻尾が伸び、マシュの脇腹に突き刺さる。
「くっ!?」
苦悶の表情を浮かべながら後退するマシュ。
（……あの槍の動きも厄介ですが、尻尾の攻撃もあるとなると……実質、二本の槍を扱っているようですね）
「もう終わり？」
「いいえ、まだです!!」
マシュは盾を構え、走り出す。盾を両手で持ち、正面に構えてタックルの体勢を取る。
物凄い勢いでエリザベートに迫るマシュ。エリザベートは跳躍し、マシュの真上を回転するように飛び上がる。そして、着地と同時に槍を突き刺す。

マシュも突進の勢いを利用し、回転して盾を振り回す。突き刺してきた槍を盾で弾くと、そのまま回し蹴りを放つ。エリザベートはバックステップして、間一髪でマシュの回し蹴りを躱す。
「うわっ!!　危ないわね!!」
エリザベートは槍を振り回し、再度構える。そして、姿勢を低くする。
「少し、本気を出してあげる♪」
そういうとエリザベートが一瞬で消えた。
「えっ?」
マシュが見失った瞬間、いつの間にかエリザベートがマシュの背後に回っていた。
一瞬で出来事でマシュの反応が遅れる。
エリザベートはその隙を見逃さず、槍を振り上げる。
「しまっ……」
盾で防ごうとするが、間に合わず、エリザベートの槍が腹部に入る。
メキメキと骨が軋む音が聞こえる。マシュは力を入れ、耐えようとするが、そのまま吹き飛ばされてしまう。
受け身も取ることができず、地面に転がる。
「はぁ……はぁ……ぐはっ……」

内臓にダメージが入ったのか、血を吐くマシュ。
エリザベートはくるくると槍を回しながら可愛く決めポーズを取る。
「どう？　今のは決まったでしょ？」
「はぁ……はぁ……ま、まだです」
盾に体重を掛けながらなんとか立ち上がるマシュ。
「マシュッ!!」
立香がマシュに駆け寄ろうとするが、葛葉が立ちはだかる。
「どいてください!!」
「駆け寄ってどうする？」
葛葉は立香に詰め寄り、長い爪が立香の首に突き刺す。爪先が首に触れ、立香の首から血が流れる。
「くっ!!」
「アンタが言っても邪魔になるだけじゃない？　魔術師でもなければ俺みたいな化け物でもないし」
葛葉は爪に付いた血を舐めとる。
「化け物……？」
「あれ？　言ってなかったっけ？　俺、吸血鬼なんだよねー」

「吸血鬼ッ!?」
「そんな訳で俺が本気を出せば、マスターであるアンタも簡単に殺せるってわけ。まぁ、【聖杯乱戦】のルールで殺すことは出来ないけど、動けないようにすることはできるし」
「マスター!!」
　立香を心配したマシュが立香の元に駆け寄ろうとする。
「あら?　貴女はマスターと仲良しなのね。でも、よそ見は厳禁よ」
　隙を見せたマシュにエリザベートは槍を振り回し、マシュの後頭部目指して全力で槍をフルスイングした。
　フルスイングした槍はマシュの後頭部にクリーンヒットし、マシュは吹き飛んだ。
　エリザベートの攻撃で脳震盪を起こしたマシュは起き上がることができなかった。
「マシュッ!!」
「だから、近づけさせないって言ってるっしょ!!」
　葛葉が立香の足を蹴りで払い、体勢を崩して倒れ込む立香。
　しかし、立香は諦めようとせず、体を引きずりながら手を伸ばす。
「マ、マシュ……」
「これでフィナーレね」
　エリザベートはマシュに近づけ、槍を振り上げる。

「マシュゥゥゥ!!」
叫ぶ、立香。
エリザベートは無情に槍を振り下ろす。

「待ったぁぁぁぁぁ!!」
「ぴぎゃっ!!」

槍を振り下ろそうとした瞬間、エリザベートが何かに轢かれた。
「はっ？」
「えっ？」
突然のことで唖然としている立香と葛葉。
葛葉が慌ててエリザベートを引いた正体を確認すると、そこには二頭の牛と巨大な戦車（チャリオット）だった。
チャリオットに乗っていたのは大柄な男、二人組だった。
その内の一人が葛葉に気が付くと、飛び降りて近づいてきた。近づいてきた男はバー

テンダーの服を着ていた。
「おや、葛葉君。ごめんね」
「ちょっ、ベルさん!!」
　ベルと呼ばれたバーテンダー風の男は立香の方を見ると、軽々と立香を抱え上げ立ち上がらせた。
「怪我はないかい？」
「え？　あ、はい」
「そりゃ、良かった。俺の名前はベルモンド・バンデラス。にじさんじ所属のライバーさ」
「ちょっとぉぉぉぉ!!　この私を轢いておいて謝罪は無いの!!」
　轢かれたエリザベートが復活し、チャリオットに乗っている男に指差す。
「何、これは【聖杯乱戦】であろう？　なら、乱入しても文句な無いはずだ」
「くうぅぅー!!」
　二頭の牛とチャリオットが消えると、乗っていた男が腰に差していた剣を取り出した。
「さぁ、やるか？　小娘」
「ちょっと待った。【イスカンダル】」

「なんだ？」
「戦うのは話を聞いてからだ」
「何？　わざわざ対話するのか？　こやつは余に啖呵を切った。戦うには十分な理由だ」
「だから、待ってくれ。いいな」
ベルモンドは真っ直ぐイスカンダルと呼ばれた男を見つめる。
イスカンダル
マケドニアのアレクサンドロス大王。真名「イスカンダル」はペルシャやアラビアでの呼び名である。
最果ての海（オケアノス）を目指して東方遠征を行い、道中の国々を蹴散らしてはその国の王や兵士達を配下に加えていった。
しかし、東の果てに辿り付く前に遠征は中断となり、その後病死した事で叶わぬ夢となった。
真っ直ぐ見つめてくるベルモンドにイスカンダルはため息を漏らし、剣を戻した。
「まったく……なぜ、こう。余のマスターは頑固者が多いのか」
「ありがとう」
ベルモンドは笑顔で感謝すると、葛葉の方を向いた。

「それで、葛葉君は彼女と戦っているんだ？」
「え、えーと……」
（やべぇー……喧嘩吹っ掛けたとは言えねぇ）
「葛葉が喧嘩を吹っ掛けました」
「叶!!」
　いつの間にか現れていた叶にチクられた葛葉。
「そうか……俺は【聖杯乱戦】には反対だったが……ライバーは強制参加だったからな。まぁ、そのおかげでイスカンダルに会えたのは良いことだけどね。だけどね……俺は言ったよね？」
　ベルモンドの雰囲気が豹変した。
「なるべくライバー同士で争って欲しくない。もし、俺の近くで戦うなら俺が止めるよ。って……確かに彼女はライバーじゃないけど、争う姿は見たくないし、誰かが傷つく姿も見たくない」
「べ、ベルさん」
「忠告はした。申し訳ないが、俺は彼女の味方に付くよ。イスカンダル!!」
「応とも!!」
　ベルモンドとイスカンダルの威圧が葛葉を襲う。

冷や汗を流す葛葉。
「スーーーー……了解っす。ランサー！　ここで終わりだ」
「ちょっとぉ!!　まだ、私のライブは終わってないわ！」
「いいから帰るぞ!!」
葛葉はエリザベートに近づくと、首根っこを掴み、引きずりながら去っていった。
「ちょっ！　分かったわ！　帰るから、離しなさい!!」
「あーあ、ここで終わりかぁ」
「叶君はどうするのかい？」
「いやー……ベルさんとは戦いたくないから僕も撤退するよ。じゃあね、藤丸立香君」
叶は立香に手を振ると葛葉の後を追いかけていった。
「あ、ありがとうございます。ベルモンドさん」
「いやー、こっちこそごめんね。そっちのお嬢さんも大丈夫かい」
「あ、はい!!」
「まったく情けないの」
立香とマシュを見て、イスカンダルが呟いた。
「おぬしらの戦いっぷりを見ていたが、互いが互いを心配して戦闘に集中しておらんかった」

「「……」」
「もう少し、互いに信頼しないか」
「まぁまぁ、その辺で……さて、一回落ち着くために奈切さんの喫茶店に行くか。君達も途中だったんだろ？」
「そ、そうですね」
　４人は奈切の喫茶店に戻った。
（……互いに信頼。か……僕はマシュを信じ切れていない……？　いや、何もできない自分に腹が立っているんだ）
　百貌のハサンの戦いでも、エリザベートとの戦いでも何もすることができなかった。逆にマシュの足手まといになってしまった自分に嫌気を指していた。
（……もっと強くならないと）

第四節～強くて可憐なキャットはワンダフル!?～

都内某所の広い公園。
時刻は深夜０時。公園は月明かりで照らされ、昼間の楽し気な雰囲気とは裏腹に不気味な雰囲気が漂っていた。
「おい！　アイツを止めろ!!」
「無理だって!!」
「動きが意味わからねぇ!!」
そんな真夜中の公園で怒号が飛び合う。
三人の男が逃げ惑うように駆け回っていた。その背後から物凄い量の土煙が舞い上がっている。
土煙を巻き起こしている正体はメイド服を着たケモ耳少女だった。
「ふふふっ！　私の勢いは誰にも止められない!!」
ケモ耳少女は獲物を狙う猛獣の如く、鋭い眼光で目の前の三人をロックオンしている。
「クソォォ!!　誰だよ！　三人なら倒せるって、言った奴！」

「長尾景です!!」
「ちょっ！　おい、とーじろー!!　言い出しっぺはハルだろ!!」
追われている三人は甲斐田晴、長尾景、弦月藤士郎の三人だった。三人、並列して走っていたが甲斐田が立ち止まった。
「仕方ない！　三人で撃つぞ!!」
「ハルゥ!?」
「しょうがないなぁ」
三人は令呪を掲げた。
「来い！【トリスタン】!!」
「ヤツを止めろ！【佐々木小次郎】!!」
「出番だよ！【バーソロミュー・ロバーツ】!!」
三人の前に三体のサーヴァントが現れた。
ハープのような弦楽器を持った赤髪の騎士。紺色の陣羽織に長大な太刀を帯びた、耽美な青年剣士。黒髪に褐色の肌をした美青年。
トリスタン
『哀しみの子』を意味する名を持つ円卓の騎士「トリスタン」。
円卓随一の弓手で、数々の武勲を打ち立てた。愛に生きる男であった為に、「王には人

の心が分からない」といい円卓を去っていった。

佐々木小次郎

日本において最も名の知れた剣士のひとり「佐々木小次郎」――その本人ではない。

「佐々木小次郎という英霊を形作る上で、最も条件の当て嵌まる無名の剣士の亡霊が選ばれた」という特異な存在である。

バーソロミュー・ロバーツ

浅黒い肌から「ブラック・バート（Ｂｌａｃｋ　Ｂａｒｔ）」の異名を持つ。バートはバーソロミューの愛称、もしくは準男爵の意味。

海賊の黄金時代と呼ばれた最後の時期にカリブ、ブラジル、ギニアなどを中心に海賊行為を働き、莫大な財をなした「大航海時代最後にして最大の海賊」。

「はぁ……私は悲しいです……呼び出されたと思えば、目の前には猛獣」

「やれやれ……イノシシは狩ったことはあるが、獣少女は初めてだな」

「トリスタン卿。小次郎殿。飽きられて、あれを倒しましょう」

三人は各々の武器を構えた。

「私とトリスタン卿であれの動きを止めます。トドメは小次郎殿が」

「かしこまりました」

「あい、分かった」
トリスタンは持っていたハープの弦に指を掛ける。バーソロミューは二丁拳銃を構える。
ケモ耳少女は目の前まで迫ってきていた。
トリスタンは弦を弾くと、ケモ耳少女の足元に斬撃が走る。
「何っ!?」
思わぬ攻撃にバランスを崩すケモ耳少女。
バーソロミューはその隙を見逃さず、拳銃を乱射させる。弾丸が地面に着弾し、ケモ耳少女は無理矢理、回避しようとして転んだ。
そのままの勢いで転げ回りながら向かってくる。
「うわぁぁぁ!!」
「来たか」
小次郎は刀を抜かず、鞘に入れたままケモ耳少女を殴りつけた。
ケモ耳少女は軌道を変え、空高く飛んで行った。飛んで行ったケモ耳少女はそのまま墜落した。
「お見事です」
トリスタンがハープを鳴らせながら小次郎に近づいた。

「いや、何。軽く力を入れて軌道を変えただけだ」
「……どうやら、まだ元気なようですね」
バーソロミューが墜落した方角を見ると、泥だらけになったケモ耳少女が立っていた。
肉球の手で器用に数本の包丁を持っていた。
「私を怒らせたいようだな」
ケモ耳少女は獣のような唸り声を上げる。
その様子にＶΔＬＺの三人は後退りした。
「ご主人!!」
ケモ耳少女が公園のベンチの方に顔を向けると、そこにはベンチに横たわっている少女がいた。
ベンチで横たわっている少女から寝息が聞こえる。
「コラッ！　起きろ、ご主人!!」
「にゃ!!」
寝ていた少女はケモ耳少女に呼ばれると飛び起きた。
寝ていたのは文野環。
「もぉー……せっかく気持ちよく寝てたのに」

「戦闘中だ。目を覚ませ」
「うーん……別に私が何かしなくても勝てるでしょぉ」
「そういう訳にもいかん。真名解放を求む」
「仕方ないなぁ」
　環はあくびをしながら令呪を掲げた。
「真名開放。【タマモキャット】。あとは宜しくね」
「これで私の本気が出せる……ワン!!」
　タマモキャット
　タマモでキャットなバーサーカーなメイド。
　語尾はワン。そして好物は人参なナマモノ。
　好きなモノはご主人。嫌いなものは自分と芸風がかぶってるもの、あと自分以外のタマモナイン。
　タマモキャットの魔力が膨れ上がる。
「これはマズいですね……マスター!!」
　バーソロミューが藤士郎に向かって叫ぶ。
「相手はバーサーカー。下手に宝具を喰らうと全滅します!!」
「……どうしよっか」

「決まってるべ!!」
「あぁ！　迎え撃とう！　トリスタン！　宝具開放!!」
「かしこまりました。マスター」
　トリスタンは再び、ハープを構えるとタマモキャット同様に魔力が膨れ上がった。
「んじゃ、決めようぜ！　小次郎!!　宝具開放!!」
「まったく……随分と勢い任せだのぉ……だが、嫌いではない」
　小次郎も刀を抜き、魔力を高める。
「……ということなので、僕たちもいこうか」
「そうですね」
「宝具開放!!」
　バーソロミューも二人同様に魔力が増幅していく。
　三体のサーヴァントによる同時宝具。
「痛みを歌い、嘆きを奏でる」
「秘剣」
「全砲門一斉掃射！」
　三体のサーヴァントの魔力は最大限まで高められる。
　トリスタンは静かに弦を弾くと、空気が揺れ、風が巻き起こる。巻き起こった風はト

リスタンを囲むように渦巻く。

そして、再び弦を弾くと、渦巻く風から真空の斬撃が放たれる。その斬撃は空気も切り裂く。

佐々木小次郎は呼吸を整えると、静かに息を吐く。余計な力は抜き、無我の境地に入る込む。

そして、刀を構える。その瞬間、目にも止まらぬ速さの斬撃が放たれた。その斬撃は円弧を描く3つの軌跡。三方向から放たれた神速の剣技は回避することは不可能。

バーソロミューの周囲に無数の海賊船が展開される。海賊船からは砲台が伸び、照準をタマモキャットに合わせる。

そして、彼の掛け声と共に天地上下左右から一斉砲撃が開始された。

「痛哭の幻奏（フェイルノート）」

「燕返し（つばめがえし）」

「高貴なる海賊準男爵の咆吼（ブラック・ダーティ・バーティ・ハウリング）」

三体のサーヴァントの宝具が一斉に解き放たれる。

「甘いワン！　……というわけで皆殺しだワン！」

魔力が最大限まで高められたタマモキャットの表情が豹変した。

己の中の野生を開放した。眼光は鋭く、口元から涎が垂れる。

足に力を入れると、足の血管に血が回り、筋肉が膨張し、足が一回り太くなる。力いっぱい踏み込むと地面に亀裂が走る。

そして、地面を蹴り上げると、その衝撃で地面が抉れ、タマモキャットの背後に衝撃波が放たれる。

凄まじい速さで駆け抜ける。

「貴様らの攻撃は見切ったワン」

バーソロミューの砲撃が降りそそぐ中、お構いなしで直線に突き進む。

目の前にトリスタンの斬撃が迫ってくる。スピードを落とすどころか、さらに加速させる。そして、トリスタンの斬撃を紙一重で躱す。

タマモキャットは斬撃を直感で回避した。

実際に目視で認識し、回避する行動をとっていたら、斬撃は喰らっていた。しかし、タマモキャットは無意識でそれを感じ取り、脳で考えるより先に野生の勘で攻撃を回避していた。

「なっ!?」

宝具を回避され、驚愕するトリスタン。

三体の元に迫ってくるタマモキャット。しかし、小次郎の回避不可能の剣戟が残っていた。

３つの斬撃がタマモキャットの首を狙う。タマモキャットは両手を上げ、自らの両腕を犠牲にして、小次郎の攻撃を受け止めた。
両腕は切断されたが、そのおかげで小次郎の懐に潜り込めた。
そして、タマモキャットは口を大きく開くと小次郎の喉元に食らいついた。
「ッ!!」
「おあっ（貰った）ああん（ワン）」
喰らいついたタマモキャットはそのまま小次郎の喉を引き裂いた。
小次郎の喉元から血しぶきが噴き出し、そのまま倒れる。
「小次郎ッ!!」
「次ィィ!!」
タマモキャットは小次郎の体を踏み台にして、トリスタンに向かって飛び掛かる。トリスタンは弦を弾いて、斬撃を飛ばす。
トリスタンの斬撃を体を捩じりながら避ける。
そして、そのままトリスタンの肩に食らいつく。
「トリスタン卿!!」
バーソロミューが拳銃を構え、タマモキャットに向かって発砲する。
タマモキャットは飛んで回避する。着地と同時に蹴りを打つ。タマモキャットの蹴

りはトリスタンの脇腹に入り、そのまま吹き飛ばされる。
トリスタンは数本の木をなぎ倒しながら吹き飛ばされ、最後は公園にあるジャングルジムに激突する。
「くっ!!　この化け物め!!」
発砲を続ける。
タマモキャットは飛び跳ねて弾丸を回避する。当たらない弾丸に焦るバーソロミュー。
そんなバーソロミューを弄ぶかのように周囲を走り回るタマモキャット。
タマモキャットが木々の間を駆け抜けた、その時。一瞬でタマモキャットの姿が消えた。
「何ッ!!」
「バーソロミュー!　上だッ!!」
見失ってしまったバーソロミューに指示を出す藤士郎。
消えたはずのタマモキャットがバーソロミューの頭上に飛び上っていた。
「しまっ」
「遅い!!」
くるくる回転しながら踵落としをバーソロミューの後頭部狙って打つ。

タマモキャットの踵落としがバーソロミューの後頭部に直撃し、地面に叩きつけられる。

倒れ込んだバーソロミューは動けなかった。

「宝具！　燦々日光午睡宮酒池肉林（さんさんにっこうひるやすみしゅちにくりん）!!　私の勝ちだワン!!」

血まみれで倒れた佐々木小次郎。ジャングルジムにもたれて倒せるトリスタン。地面に倒せ付すバーソロミュー・ロバーツ。

三体のサーヴァントは粒子となり、消滅しかけていた。

「ま……マジか……」

「全滅だとッ!!」

「バーソロミュー……」

「あ、終わった?」

ベンチでくつろいでいた環がタマモキャットに近づく。

「うわっ……血だらけじゃん。私に近づかないでね」

「そんなことを言うなよ、ご主人」

大満足な表情のタマモキャットは芝に寝転んだ。

いつの間にか切断されていた両腕が元に戻っていた。

「と、いうことで私は一休みするワン」

タマモキャットはそのまま眠りだした。

――――――――。

「どうだい、藤丸君。これが【聖杯乱戦】さ」

「…………これが…………」

立香はベルモンドに差し出されたタブレットで戦いの様子を見ていた。

立香とマシュはベルモンドの誘いで、ベルモンドのバーに来ていた。バーにはお客はおらず、カウンターにいるベルモンドとその向かいに座る立香とマシュ。そして、カウンターの端でビールを巨大なジョッキで飲み干しているイスカンダルだけだった。

イスカンダルが豪快にビールを飲み干すと、勢いよくジョッキを置く。

「カーーーッ!!　このビール。という酒は上手いな!!　葡萄酒も美味ではあったが、葡萄酒とは異なる香り……そして、なんと言っても！　この喉ごし!!　飲む手が止まらんわ!!」

「飲んでも良いけど、ジョッキは割るなよ」

　ベルモットは空いたジョッキにビールを注ぐ。並々に注がれるとイスカンダルはすかさずジョッキを手に取る。
「ごめんね、騒がしくて。……それで実際に【聖杯乱戦】を見た感想はどう？」
「そうですね……やっぱり……多彩なサーヴァントが戦っている分、それぞれの対策が大変そうですね」
「ベルモンドさん、質問なのですが」
　マシュが手を上げる。
「【聖杯乱戦】のルールで強制的に戦うことにはなりますよね」
「そうだね。さっき見せた、文野環ＶＳ長尾景がそうだったね」
「ですが、先ほどのように三対一でもルール違反にはならないのですか」
「おっ？　良いところを突くね。ルールでは『戦わなければならない』。としか、提示されていないから乱入や加戦することは禁止されていないんだ」
「そうなんですね」
「なるほど……だったら、徒党を組んだ方が勝率は上がるのか」
「まぁ……文野環に関しては完全にイレギュラーだけどね」
　ベルモンドは苦笑いしながら、立香とマシュの前にフライドポテトを出した。
「イレギュラー？」

「彼女は……なんて言えば良いのかな？　彼女自身が狂人（バーサーカー）なんだよ。良い意味でも悪い意味でも常識外れ。どんなどんなこ行動を取るかが予想できない」
「す……すごい方なんですね……ん？」
　ふと、立香はタブレットに目がいった。
　先ほどの映像に進展があったようだ。
「あれ？　誰か来ましたよ？」
「ん？　おや？　これは……イスカンダル!!」
　ベルモンドは手を拭い、カウンターを飛び出した。
「行くのか？」
「あぁ!!」
「了解した!!」
　イスカンダルはベルモンドの思考を理解したのかビールを一気飲みし、バーの入口に戦車を呼び出した。
「どうしたんですか？」
「言ったと思うけど、俺は極力【聖杯乱戦】を止めたいんだ。強制的な戦闘はシステム上、仕方ないけど……無意味な戦闘なら止める」
「……僕たちも行きます！　マシュ!!」

「はいッ!」
「分かった！　イスカンダル！　この子たちも頼む」
「まったく……仕方ない」
イスカンダルは三人を乗せると戦車を走り出させた。
「ベルモンドさん、さっき映像に映った人は?」
「あー……彼女は樋口楓。この【聖杯乱戦】の優勝候補さ」

――――――――――――。

「なんや、野良猫か」
「あ、でろーんさん」
深夜の公園で寝転んでいる環とタマモキャットの所に楓とモードレッドがやってきた。
モードレッドは警戒して剣を構える。
「マスター、アイツもライバーか?」

「ん？　あぁ、モードレッドは知らんのか。アレは文野環。結構、やんちゃな子や」
「で、やるのか？」
「そうだなぁ……どうする？　野良猫」
「どっちでもいいよー」
「なら、行かせてもらうぜ!!」
　モードレッドは剣を構えながら走り出す。
「来たよ、バーサーカー」
「ご主人。申し訳ないが吾輩は休息中である。非常に眠い」
「え？」
「おらぁ!!」
　モードレッドが剣を振り下ろす。剣が環の目の前に迫ってくる。
　しかし、その剣をタマモキャットが受け止めた。受け止めた本人は眠気眼だった。
「サーヴァントにだって休息は必要だ。だが……」
　タマモキャットは目を擦ると、目つきが変わった。
　獣のような瞳孔になっていた。
「私のお昼寝タイムを邪魔する、不届き者には制裁だワン!!」
　受け止めていた剣を振り上げる。

「うぉっ」
「ワン!!」
バランスを崩したモードレッドにタマモキャットのパンチが入る。
モードレッドは吹き飛ばされるが、上手く着地して態勢を整える。
「コイツ、バーサーカーのくせに意外と頭が切れるヤツだな」
再び、剣を構え直し、タマモキャットと距離を詰める。
モードレッドが剣を振るうとタマモキャットは自身の包丁で受け止める。モードレッドは力ずくで剣を押し込む。
タマモキャットも負けじと力を入れ、押し返す。交差する剣と包丁に火花が走る。
するとタマモキャットが大きく口を開き、モードレッドに噛みつく。その行動に気が付いたモードレッドは剣を握っていた左手を離し、そのままカウンターでタマモキャットのアゴにアッパーを放つ。
モードレッドのアッパーは綺麗にアゴに入り、タマモキャットが吹き飛ぶ。
「おいおい、これで終いか?」
吹き飛ばされたタマモキャットが立ち上がると唾を吐く。
血が混じった唾と一緒に鋭い牙も吐き捨てる。先ほどのアッパーでタマモキャットの牙が折れた。

モードレッドのアッパーが効いたのか、ふらつきながら口の端に付いた血を拭う。
「ブチ切れちまったぜ」
タマモキャットの表情が変わる。
怒りで理性を失った猛獣の顔だった。
「ウオォォォォォン!!」
タマモキャットは雄叫びを上げる。その咆哮は空気を揺らし、環や楓は思わず耳を塞いだ。
「ここからが本番か」
「グオォォ!!」
モードレッドが気合を入れなおすと同時にタマモキャットが走り出す。
四つん這いの状態だが、今までよりも早く駆け抜ける。
「くっ！　速ぇ!!」
向かってくるタマモキャットを捉え、切り裂く。しかし、手ごたえはなく虚空を切り裂いていた。
モードレッドが切り裂いたのは残像だった。
「なっ!!」
いつの間にか背後に回っていたタマモキャットがモードレッドの頭を掴み、地面に叩

きつける。
　地面に叩きつけられたモードレッドはタマモキャットの怪力によって、身動きが取れなかった。
「くそっ!!　どきやがれ!!」
　タマモキャットはモードレッドの頭を押さえ突きながら腹部を殴りつける。
「がはっ……」
「ウオォォォォォ!!」
　何度も何度も腹部を殴りつける。
　その衝撃で血を吐くモードレッド。
　モードレッドは鎧で守られているがタマモキャットの打撃は鎧ごと砕く勢いで殴り続ける。次第に鎧にひびが入っていく。
　打撃を防ごうとするが、身動きが取れないのとタマモキャットの猛攻で、ただ受けるしかなかった。
「モードレッド!!」
「くっ……ふざけやがって!!」
　モードレッドは無理矢理、足を上げると膝蹴りでタマモキャットの打撃の軌道をずらした。タマモキャットの打撃は地面に当たり、凄まじい勢いだったのか、地面に埋まっ

てしまった。
地面に埋まってしまった腕を引き抜こうとするが、中々抜けない。
「ぐっ!!　だが、隙はできた!!」
モードレッドはその隙を逃さず、剣を握り、押さえつけられていた腕を切り裂いた。
「グゥゥ……」
腕を切られよろめくタマモキャットにモードレッドは蹴りを入れ、吹き飛ばした。
吹き飛ばしたタマモキャットは地面に落ちると、むくりと立ち上がる。モードレッドも体勢を立て直し、剣を構える。
互いに先ほどの攻撃で深手を負ってしまった。
肩で息をするモードレッド。切断された腕から血が滴るタマモキャット。
先に動いたのはタマモキャットだった。
タマモキャットは飛び上がると公園の木々の間を飛び跳ねるようにモードレッドに近づく。モードレッドは魔力をクラレントに集約させる。
(……互いに消耗はしているはず。ヤツは次の一撃で俺を仕留めるつもりだ。なら、ここは真っ正面から叩き切るのみ!!)
魔力が集められたクラレントからは真紅の光が放たれ、赤い稲妻が漏れだす。
クラレントを両手で握り、突っこんでくるタマモキャットをただ待つ。

「ウオオオオオオン!!」
「喰らいやがれ!!」
タマモキャットは雄叫びを上げながら、腕を振り上げた。対するモードレッドはカウンターを仕掛けるように剣を振るう。
しかし、ここでタマモキャットの直感が動いた。脳で考えるより先に体を捻らせ、振り上げた腕で剣を受け止めた。受け止めた腕は魔力を集ったクラレントによって焼き払われた。
タマモキャットは腕を犠牲にしながら、そのままモードレッドに突っこむ。そして、喉元目掛けて噛みつこうとする。
「アンタなら、そのまま突っこんでくると読んでいたぜ!!」
モードレッドはクラレントを離し、逆手に持ち替える。
そして、そのままクラレントを振り上げる。振り上げられたクラレントは突っこんできたタマモキャットを切り裂いた。
「ガッ……」
タマモキャットはそのまま倒れ込む。
モードレッドの一撃により、致命的なダメージを負い、タマモキャットの体が粒子となって消滅していく。

「はぁ……はぁ……俺の勝ちだ!!」
「負けてしまったか」
消えかかっているタマモキャットに環が近づく。
「すまんな、ご主人」
「別にいいよ。今度は二人でのんびりお昼寝しようね」
「……ふふっ……そうだな」
そう言い残すとタマモキャットは消滅した。
モードレッドは深く息を吐くと剣を閉まった。モードレッドに駆け寄る楓。
「お疲れさん」
「おう」
「……でろーんさん」
「ん?」
タマモキャットを見送った環は楓に近づいた。
「今度は負けないからね」
「……せやな!　また、あの猫サーヴァントと出会えたら戦おうな!!」
楓は環の手を握った。

第五節～黄金の英雄譚～

都内某所の広い公園。
モードレッドとタマモキャットが戦った後、楓とモードレッドはベンチで休憩していた。
「はぁー、疲れた」
「お疲れさん。なんか飲み物買ってくるわ」
「ん。頼むわ」
楓はベンチから立ち上がると自動販売機に向かった。
自動販売機に向かう途中、先の戦いを思い返していた。
悲しそうな環の表情が思い浮かぶ。
「はぁ……やっぱりキツイなぁ」
自動販売機に小銭を入れ、ボタンを押す。ガコッとお茶のペットボトルが落ち、拾うためにしゃがむ。
楓はため息を漏らしながらペットボトルを取り出そうとした瞬間。
「マスター!!」

「は？　ぐぇっ!!」
突然、現れたモードレッドが楓の襟を掴み、強引に引っ張った。
引っ張られた楓はバランスを崩し、尻もちをつく。
「痛っ!!　ちょっと、モードレ……ッ!!」
楓が顔を上げると、さっきまでいた自動販売機にクナイが突き刺さっていた。
もし、何も知らない楓がペットボトルを拾い、立ち上がっていたら、飛んできたクナイが間違いなく突き刺さってしまっていた。
現状を理解した楓は血の気が引き、顔が真っ青になる。
「おい、どこのどいつか知らないが、マスターを殺すのは反則だろ？」
「確かにマスターを殺してはいけない。というルールはあるけど、狙ってはいけない。ってルールはないよね？」
暗闇から現れたのはましろだった。
「……ましろ君」
「こんばんは。樋口先輩」
ましろの背後には複数の人影が立っていた。
「やれるか？」
「いや、さすがに連戦はキツイ。ましてはこの人数だ」

「逃げるが一番ってわけかいな」
「逃がしませんよ」
　ましろが指を鳴らすとモードレッドと楓を囲むように数人の人影が現れた。
　人影の正体は百貌のハサンだった。
「お覚悟をッ！」
　一体の百貌のハサンがクナイを構えると楓に襲い掛かった。
　モードレッドは咄嗟に楓の頭を掴み、押さえつけた。クナイが楓の頭上を通り過ぎる。そして、モードレッドは畳み掛けるように襲い掛かってきた百貌のハサンを蹴りつける。
　蹴り飛ばされた百貌のハサンは自動販売機に激突する。
　ぶつかった衝撃で自動販売機が壊れ、ジュースやお茶などが取り出し口から大量に溢れ出す。
　今度は刀を持った百貌のハサンと棍棒を持った百貌のハサンが同時に襲い掛かる。
「ちっ！　面倒くせぇ!!」
　モードレッドは苛立ちながらクラレントで刀を受け止め、そのまま飛び上がって棍棒をかわす。
　そして、空中で体を捻らせ、回し蹴りで襲い掛かってきた二体の頭を蹴り飛ばす。

しかし、百貌のハサンの猛攻は止まらない。クナイを持った三体の百貌のハサンが同時に襲い掛かる。
「マスター！　しっかり着地しろよ!!」
「はっ？」
モードレッドは楓を抱えると、そのまま放り投げた。
放り投げられた楓は百貌のハサンの包囲を抜け、地面に落ちた。公園の芝生のおかげで怪我はしなかった。
「ちょっ!!　モードレッド!!　っ!?」
突然、放り投げられた楓はモードレッドの方を振り向く。
すると三体の百貌のハサンのクナイがモードレッドの体に突き刺さっていた。
「モードレッドッ!!」
「クソッ……!!」
「マスターを守ったか。だが、これで終わりだ」
モードレッドにクナイを突き刺した三体の百貌のハサンが力を込める。クナイがモードレッドの肉体に深く刺さる。
突き刺されたところから鮮血が流れる。
そして、モードレッドが怯んでいる隙に二体の百貌のハサンが左右から襲い掛かる。

「くっ……うおぉぉぉぉ!!」
「何ッ!?」
モードレッドは苦悶の表情を浮かべながら、突き刺してきている内の一体の頭を掴み、そのまま力任せに投げ飛ばした。
投げ飛ばされた百貌のハサンは襲い掛かってきた二体の百貌のハサンを巻き込んで倒れ込む。
そして、残った二体の百貌のハサンが突き刺していたクナイを手放し、距離を置こうとした瞬間、クラレントを振り放ち二体の百貌のハサンを切り裂いた。
モードレッドは息を切らしながら突き刺されたままのクナイを引き抜き、投げ捨てた。刺された部分から血が滴り落ちる。
「はぁ……はぁ……舐めるなよ」
「コイツ……だが、確実に傷は負っている!!　全員で襲い掛かれ！」
女性の百貌のハサンの指示により、一斉にモードレッドに襲い掛かる。
「クソったれが!!」
モードレッドは相打ち覚悟でクラレントを構える。
その瞬間。

「下らぬ」

無数の閃光が襲い掛かってきた百貌のハサン達を貫いた。
その衝撃は凄まじく、周辺が土煙で覆われる。
「ごほっ！　ごほっ！」
モードレッドはクラレントで土煙を払うと、周囲を囲っていたはずの百貌のハサンが全滅していた。
残っていたのはましろの側で立っていた女性の百貌のハサンだけだった。
「な……何だと……」
「……マジか……」
突然のことで驚愕するましろと百貌のハサン。
楓は閃光が放たれた先を見ると、そこには黄金の鎧を纏った男が立っていた。
「あのセイバーの子というから見に来てみれば……この体たらく」
黄金の鎧の男はモードレッドに近づくと蔑むような目で見下す。
「何だ……今のは……。貴様ッ！　何も」

百貌のハサンが黄金の鎧の男に問いかけようとした瞬間、閃光が百貌のハサンの頬を掠めた。
背後で爆発が起き、百貌のハサンは何が起きたか理解できず、言葉が詰まってしまう。
「おい……雑種。誰に対して口を聞いている？　まずは平伏せ」
黄金の鎧の男の高圧的な眼光に思わず、膝をついてしまう百貌のハサン。
（コイツは危険だ!!　マスターを連れて逃げ切れるか）
思考を巡らせながらましろの方を見る百貌のハサン。
マスターであるましろも間にが起きているか理解できていなかった。
「なんや、助っ人か」
「まったく……あの王様は」
楓の横にいつの間にか制服を着た青年が立っていた。
「剣持!!」
「こんばんは。でろーんさん」
「あのサーヴァントはアンタのか？」
「えぇ……一応は」
「一応？」
「彼、まったく僕の言うことを聞かないので」

青年。剣持刀也は呆れながら自分のサーヴァントである黄金の鎧の男を見つめた。
「てめぇ……邪魔する気か」
「ほざけ。あの騎士は気品があったが……」
黄金の鎧の男はモードレッドの全身を見る。
「貴様には気品の欠片もない。先の戦いもまるで野犬のような下品な戦い方だ」
「あぁん!?」
モードレッドはクラレントで体を支えながら、立ち上がると黄金の鎧の男を睨みつける。
「今だッ!!」
モードレッドと黄金の鎧の男が揉めている内に百貌のハサンは逃げるためにましろを抱えようとする。
それを横目で見ていた黄金の鎧の男が手を上げる。すると、空中に黄金の穴が開かれる。黄金の鎧の男が上げていた手を振り下ろすと、黄金の穴から閃光が放たれる。
閃光は百貌のハサンの体を貫いた。
「がっ……」
「この我(オレ)から逃げられると思うなよ、ネズミ風情が」
体を貫かれた百貌のハサンは消滅してしまった。

「ハ、ハサン」
　ましろはその場で立ちすくんでしまった。
「クソッ！　よくも俺の獲物を横取りしたな」
「ほぉ……この我に盾突くか」
　黄金の鎧の男の上空に無数の黄金の穴が開かれる。
「ストップ！　ストップです！」
　剣持が黄金の鎧の男の前で静止を促す。
　黄金の鎧の男は黄金の穴を閉じる。すると背後に黄金の玉座が現れ、黄金の鎧の男はそれに座る。
「なんだ？」
「なんだ。じゃない!!　アンタがでろーんさんのサーヴァントが気になるからって来てみれば、いきなり戦闘とか！　勘弁してくれよ！」
「我に意見するか」
「あぁ、意見するさ！　僕はお前のマスターなんだぞ!!」
「その小五月蠅い口を塞いでやろうか」
　黄金の鎧の男の上空に再び、黄金の穴が開かれる。
「良いのか？　僕が死ねばアンタも消えるぞ？」

「マスターである貴様が死んでも一定時間なら活動は可能だ。その時間で全てのサーヴァントを全滅させることなど造作もない」
「本当か？」
「……よかろう。貴様の意見を尊重してやる」
　黄金の穴が消滅する。
「はぁ……まったく、この王様は」
「で、剣持。アンタらはウチらの敵か？」
　剣持を睨みつける楓。モードレッドも傷を負いながらもクラレントを構える。
「いえいえ!!　今回はこの王様の暴走したせいであって敵意はありませんよ」
「つざけんな!!　今すぐ、切り捨ててやる!!」
「落ち着かんか、モードレッド!!」
　興奮するモードレッドを抑え込む楓。モードレッドも乱暴に頭を掻きむしると深呼吸して、自らを落ち着かせた。
「ったく……分かったよ。それにアンタはさっきから気になることを言っていたしな」
「ん？」
「アンタ。俺と誰かを比べていただろ？」
「あぁ……そのことか」

黄金の鎧の男は顎に手を置くと何か考え始めた。
「そうだな。だが、来客の到着を待とう」
「「？」」
三人が黄金の鎧の男の発言に首をかしげていると、上空から何か音が聞こえた。
楓と剣持が見上げると、空を戦車が駆け抜けていた。
「はっ？」
二人が困惑していると戦車は目の前で静止した。戦車から飛び落ちてきたのはイスカンダルだった。
「久しいな、英雄王」
「息災であるか、征服王」
黄金の鎧の男はイスカンダルを見て嬉しそうな表情を見ていた。
「イスカンダル!!」
イスカンダルに続き、ベルモンド、立香、マシュも降り立った。
「ベルさん……それとあの二人は通達で来ていた」
「やぁ、楓ちゃん、刀也くん……それとましろくん」
「先輩」
「あぁ……あそこにいるのは【ギルガメッシュ】王」

ギルガメッシュ

紀元前、シュメルの都市国家ウルクを治めていた半神半人の王。

伝説だけではなく実在したとされる、人類最古の物語『ギルガメシュ叙事詩』に記された王。

ギルガメッシュを見た立香とマシュに緊張が走る。

二人はギルガメッシュの傍若無人ぶりを知っているため、何が起きるか分からないからだ。

「あー、あの王様のこと知っているんですね。言っておきますが僕は戦うつもりはないですからね」

「あぁ、分かってるさ。本当は文野環と楓ちゃんの戦いを止めたかったんだけどね」

その言葉を聞き、楓は気まずそうに頬を掻いた。

「それで……その二人は？」

「あぁ、自己紹介してなかったね。どうだろ？　サーヴァントはサーヴァント同士で話したいことがあるようだし。マスターはマスター同士で話し合おう」

「そうですね。でろーんさんも良いですよね」

「せやな。今、戦ってもしゃぁないし。モードレッド、アンタも剣持のサーヴァントと話したいことがあるんやろ？　行ってこいや」

「……ったくよ。分かったよ」
ベルモンドはモードレッドと楓のやり取りを見ていると、そのまま　ましろの方を見た。
「ましろくんはどうする？」
「あー……僕は負けちゃいましたからね。このまま帰りますよ」
「そうかい」

――――――

　イスカンダルはモードレッドを見定める。
「しかしのぉ……あのセイバーとは何か……こう違うの」
「あぁん!?　てめぇも何か言いてぇのか。……いや、待て。今、なん言った?」
「あのセイバーとは」
「違ぇ!!　あのセイバーの子って言ったか?　もしかして……お前ら、父上を知っているのか?」
「あぁ、そうだ。余とそこの英雄王。そして、貴様の父……いや、だが、女だから違うのか?　まぁ、良いか。貴様の父親、騎士王はとある聖杯戦争で戦い、そして三人で酒を飲んだこともある」
「マジかよ」
　モードレッドは頭を乱暴に掻きむしりながら酒を一気飲みした。
「で、何で集まっているんだ?」
「そうさな……では、セイバー。貴様の実力を見せてもらおうかの」
「ほぉ……」
「あん?」
　モードレッドはクラレントを呼出し、そのまま握った。
「それは俺とやるってことか?」

「いや、相手は余や英雄王ではない。……出てこい」
イスカンダルは茂みの方を見つめると、そこから黒い靄で覆われた人影が現れた。
人影は黒い靄のせいで正体が分からなかった。しかし、腰に刀を差しているのは分った。
「なんだ？」
「招かれざる客よのぉ」
「……イ……」
「あん？」
モードレッドはクラレントを構えながら人影を警戒する。
「……イ……。首……」
「首だぁ？」
「首ヲ寄コセェェ!!」
人影は刀を抜くと、モードレッドに向かって襲い掛かった。
モードレッドは咄嗟にクラレントで人影の刀を受け止めた。
「くそっ！　結局、俺が戦うのかよ!!」
「首イ……首イイイ!!」
人影は刀身に手を置き、体重を掛けてくる。クラレント事、切り裂こうとしてきたの

だ。
クラレントと刀の刃が擦れ合う度に火花が散る。
モードレッドが距離を置くために人影を蹴り飛ばそうとした瞬間、人影が自らの刀を手放した。そして、拳を構えると右フックを放ってきた。
「何ッ!?」
人影の右フックはモードレッドの脇腹に刺さる。
鎧を纏っていたモードレッドだが、メキメキと骨が軋む音が聞こえた。
「ちっ……コイツ、意外と動けるじゃねぇかよ!!」
「死ネッ!!」
人影は自由落下する刀を左手で掴み取ると、そのまま下から上へ振り上げる。
モードレッドはバックステップして紙一重で回避する。
しかし、刀は頬を掠め、頬から血が滴り落ちる。流れ落ちる血を左手で乱暴に拭き取る。苛立ちながらも息を大きく吐いて己を落ち着かせる。
その姿を見て、嘲笑うかのように刀を振り回す人影。振り回される刀は空を切り、ヒュンヒュンと音を鳴らしながらモードレッドを挑発する。
落ち着いたモードレッドの目つきが変わり、クラレントを構える。
地面を踏みしめると人影との距離を一気に詰める。そのまま、クラレントを振り下ろ

す。

凄まじい勢いで振り下ろされたクラレントを人影は刀で受け止める。受け止めた瞬間、人影の背後に衝撃が放出され、地面の表面が吹き飛び、抉れ取られた。

抉られた地面の破片が観戦していたギルガメッシュとイスカンダルの方に飛んでいくが、ギルガメッシュが展開させた黄金の穴によって防がれる。

ギルガメッシュとイスカンダルは何事もなかったかのように酒を飲み続ける。

振り下ろされたクラレントの威力が物語っている。クラレントを受け止めた人影の足元もクレーターとなり、地面が凹んでいる。

「うおぉぉぉ!!」

モードレッドはクラレントを強く握り力を入れる。受け止めていた人影の足元のクレーターがさらに広がる。人影はまっすぐ立つことができず、片膝をついてしまう。次第に人影が持っている刀にひびが入り、軋む。

「喰らいやがれ!!」

受け止めていた刀が粉砕され、クラレントが人影を一刀両断した。

人影はうめき声を上げながらよろめく。

モードレッドはその隙を逃さず、クラレントを体に突き刺す。クラレントを突き刺された人影はピタリと動きを止めた。

これで終わりかと思えた。
「はぁ……はぁ……」
「おぉ。セイバーのやつ、やりおったか」
「いや。まだだ」
様子を見ていたギルガメッシュが呟くと人影が纏っていた黒い靄が濃くなってきた。やがて黒い靄は切り裂かれた部分に吸い込まれ、切り裂かれた箇所が見る見るうちに塞がっていく。
完全に元の姿に戻った人影は突き刺されたままのクラレントを掴んだ。
「何ッ!?」
「首ヲ置イテケェ!!」
モードレッドはクラレントを引き抜こうとするが人影がクラレントを掴んでいるため、身動きが取れなかった。すると人影の体から無数の刃が生えると、モードレッドに向かって伸びてきた。
「マジかよ!!」
咄嗟にクラレントを離し、バク転しながら伸びた刃をかわしていく。
伸びきった刃は人影の元に戻り、人影は体中に刃を生やしたまま、モードレッドのクラレントを抜き出すとモードレッドとは反対の方向に投げ捨てた。

人影は右手で自身の刀を掴むと左手の形を変形させ、巨大な刀へと姿を変えた。
「オオォォォ!!」
人影が雄叫びを上げると体中の刃が伸びだし、モードレッドに襲い掛かる。
モードレッドは襲い掛かる刃に向かって走り出す。刃をギリギリで躱しながら人影と距離を詰める。
近づいてくる相手に人影は左手の巨大な刀を振り上げる。その大きな動作の隙を見て、モードレッドはタックルを仕掛ける。
タックルを喰らった人影はバランスを崩し、倒れる。モードレッドは体勢を立て直すと、そのまま捨てられたクラレントに向かって走り出す。
人影は倒れ込んだまま、体中の刃を伸ばす。
モードレッドの背後を狙う刃。刃がモードレッドに突き刺さる前にクラレントを回収したモードレッドは襲い掛かる刃を振り払う。
自分の武器を取り戻したモードレッドはクラレントを構え、魔力を溜める。赤い魔力がクラレントに集まり、周囲に赤い稲妻を放つ。
立ち上がった人影はもう一度、体中の刃を伸ばす。
「遅い!!」
魔力を最大限溜めたモードレッドはクラレントを振り下ろす。

振り下ろされたクラレントからは赤いレーザーのような斬撃が放たれる。斬撃は襲い掛かる刃を消し去り、そのまま人影を飲み込んだ。

人影は肉体を再生させようとするがモードレッドの斬撃に焼き尽くされ、徐々に消滅していく。

「……アァ……天下ヲ……我ガ主ニ……アァァァァァ!!」

人影は断末魔を上げながら消え去った。

「……はぁ……はぁ……今度こそ……やったか」

「いやー!　見事!!」

いつの間にかモードレッドの背後に立っていたイスカンダルがモードレッドの背中を勢いよく叩いた。

その衝撃でせき込むモードレッド。

「ごほっ!　ごほっ!　この野郎!!」

「どうだ、英雄王?　こやつは合格かの?」

「いいや、あのような雑魚一体に手こずるとは無様だな」

「あんだとッ!?」

「モードレッドッ!!」

騒ぎを聞き連れて来たマスター陣が一斉にやってきた。

マシュも盾を構えて臨戦態勢だった。
「何があったんや!!」
「あー……説明すると長くなるっちゃなるが……」
「イスカンダル。説明を」
「うむ。ちと、こやつの技量を知るために一興をな」
「……まったく」
イスカンダルから事情を聴いたベルモンドは頭を押さえながらため息をついた。
「雑種、帰るぞ」
「ちょっ!!　待ってよ、王様!!　では、皆さん。また会いましょう!!」
いつの間にか姿を消していたギルガメッシュの後を追いかけるように走り出す剣持。
「み、皆さん。取り敢えず、戻りましょう」
「……はぁ……そうだね。藤丸君の言う通りだ。一度、俺のバーに戻ろうか」
残ったメンバーはこの場を立ち去った。

――――――

奈切の喫茶店地下倉庫。
薄暗い地下部屋で奈切は一人、椅子に座りながらグラスにワインを注ぐ。
奈切はグラスを鼻に近づけるとワインの香りを楽しんでいた。
「いい香りだ……素晴らしい」
一口飲むと口いっぱいにワインの深みが広がる。
奈切はワインを飲みながら棚に陳列されている複数の黄金の盃を眺める。
ワインを一口飲むと、何かに感づき、グラスを置いた。
「……セイバーがやられたか」
奈切は立ち上がると黄金の盃を手に取った。盃の輝きを眺めながら、盃を傾ける。
すると盃から黒い液体が滴る。黒い液体は泥のような粘度を持っており、垂れるように滴が落ちる。
液体が水たまりのように溜まると、液体が動き出す。そして、少しずつ盛り上がり人の姿に変わっていく。
人の姿をした液体は先ほど、モードレッドと戦った人影となって、奈切の前に跪いた。
「……アァ……ァ……ァ……」
「うむ。まだ、復活したばかりだから言語が話せないのか」

黄金の盃を棚に戻すと、再び椅子に座った。
「実験は成功だ。次のフェーズに移行だな……ハハハハハッ!!」
奈切は嬉しそうにグラスに手を取る。

第六節～ＪＫセイバー、天を舞う～

都内某所。とある学校の校舎。

一つの人影が物凄い勢いで会談を駆け降りる。途中で廊下へ出ると、その勢いのまま廊下を駆け抜ける。

通り抜けた勢いで廊下の窓が揺れ、ガラスにヒビが入る。

その人影の後ろから別の人影が追いかけてくる。

「ちょっ！　どこまでも追いかけてくるし!!」

先頭を走っている人影は女子高生の格好をした少女だった。肩にはアクセサリーを大量につけたカバン。そして、その姿には似ても似つかない刀の鞘が腰に差してあった。

「どうすんのよ！」

頭についている獣耳をピコピコ揺らしながら一人で声を荒げている。

その後ろを追いかける別の人影。その人影は文字通り、影だった。西洋風の甲冑を身にまとい、手には長い槍を持っていた。１ｍは超える柄に剣のように長い刀身、その刀身も歪な形をしていた。

影の鎧騎士は無言で女子高生の後を追いかけていた。
「え？　準備が終わるまで時間を稼げ？　もぉ――！　これが終わったらケーキ奢ってもらうからね！」
女子高生は急ブレーキをかけて停止すると、来ていた服が変わり制服から白拍子風のミニスカ装束になった。頭には烏帽子が乗っていた。腰に差してあった刀を抜くと、腰を落として姿勢を低くした。
女子高生が武器を構えたのを見た鎧騎士は片手で持っていた槍を両手で持ち直し、そのまま剣先を女子高生に向けて突進してきた。
「そんな見え見えの攻撃！」
女子高生は跳躍して、突っ込んできた鎧騎士の頭上を飛び上がった。鎧騎士の背後につくと刀を横一線に振りぬいた。背後を取られた鎧騎士は前に突き付けていた槍を地面に突き刺し、棒高跳びの要領で飛び上がり、女子高生の攻撃をかわした。
「マジぃ!?」
確実に不意を突いたつもりだった女子高生は驚愕しながらも、右足を前に出して今度は刀を振り上げた。鎧騎士の着地を狙った追撃だ。
鎧騎士は着地する前に槍を振り下ろし、女子高生の剣戟を受け止めた。そのまま着地すると同時に右肩を前に出してタックルをしてきた。女子高生はバックステップで直

撃をかわしたが、タックルの風圧で吹き飛ばされた。吹き飛ばされながらも数回ステップを踏んで体制を整え、乱れた衣服を直した。

「お気にの服なのにーー！　チョー怒ったし！」

女子高生の顔つきが変わり、真剣な表情になった。その様子を見て鎧騎士は槍を構えた。女子高生が指を鳴らすと上空に2本の刀が展開された、2本の刀は宙を浮いていた。女子高生は鎧騎士に指を差すと2本の刀は鎧騎士に向かって飛んで行った。

鎧騎士は槍を振り回し、飛んできた2本の刀を払うが、弾かれた2本の刀は軌道を変え再び、鎧騎士に向かって飛んでいく。まるで自動追尾のように襲い掛かってきた。

鎧騎士が2本の刀を相手をしている隙に女子高生は鎧騎士との間合いを詰めた。

「これでも喰らえ！」

女子高生が刀を振ると、刀が変形に水流となった。突然現れた水流に鎧騎士は回避しようとするが、一本道の廊下では逃げ場がなく、そのまま水流に飲み込まれた。やがれ水流に耐え切れなくなった窓ガラスが割れ、そこから水が流れ落ちる。廊下の水かさが低くなると、そこには倒れている鎧騎士の姿があった。

「ふぅ、いっちょ上がりっしょ！」

「あーあ、滅茶苦茶だよ」

女子高生の背後から一人の大柄な男がやってきた。大柄な男は奇抜な格好でメイド

服を着たムキムキのオカマだった。さらに耳が尖っており、メイド服を着たムキムキのオカマはエルフでもあった。

メイド服を着たムキムキのオカマエルフの名前は花畑チャイカ。

チャイカは廊下に散らばったガラスを踏まないように歩きながら女子高生に近づいた。

「あーー！　チャイちゃん！　命令が適当過ぎるし」

「いや、マスターって呼んでよ。鈴鹿御前さん？」

鈴鹿御前

坂上田村麻呂と共に数多の鬼を退治した逸話を持つ女性。

互いに一目惚れしていた両人は色々あって一緒に暮らすことに。その後は逸話通りに悪路の高丸など数々の鬼を二人で退治し、宿敵大嶽丸を倒すため鈴鹿は三年間かけて偽りの花嫁を演じ神通力で強固な皮膚を柔らかくし、討ち取った。

鈴鹿御前は不服そうに頬を膨らませながらチャイカに近づいた。

「マスターって柄じゃないっしょ？　それよりも折角、準備したのに呆気なく倒しちゃったね」

「まぁーね……何事もなく倒せたのは良いことだし。さっさと帰るとしますか」

二人は身支度を整え、帰宅しようとした瞬間、微かに倒れている鎧騎士から物音が聞

こえた。
鈴鹿御前は表情が一変し、チャイカを突き飛ばした。突き飛ばされたチャイカはバランスを崩しながらも前に進んだ。
「ちょっとー何？」
「チャイちゃん、まだアイツ死んでない」
「はい？」
鈴鹿御前が鎧騎士の方を指さすと、鎧騎士に纏っていた黒い靄が濃くなってきた。やがて黒い靄は鎧騎士に吸い込まれ、ボロボロになっていた鎧が直っていった。完全に元通りになると鎧騎士は立ち上がり、槍を構えた。
その構えは投擲するような構えだった。構えられた槍に魔力が集中される。魔力は黒い靄となり、やがて黒い渦になって槍に集まる。
その魔力量で鈴鹿御前は察した。敵は宝具の準備をしているのだ。
「……マジですか」
「チャイちゃん逃げて！　あれはマジでヤバい!!」
「嘘だろぉぉぉ!!」
鈴鹿御前の合図で猛ダッシュんで廊下を走るチャイカ。
転びそうになりながら階段の所の曲がり角に滑り込んで、身を隠した。

「あの鎧は何をしようと!?」
「……おそらく宝具っしょ。チャイちゃん、魔力を頂戴。こっちも最大火力で対抗っしょ」
「……うーん……」
　チャイカはポケットからスマホを取り出し、操作した。誰かに通知を送るとすぐに返信が返ってきた。
「そうだね……３０秒。そんだけ稼いでくれればいける」
「了解!!」
　その言葉を聞いて鈴鹿御前は笑みを浮かべた。
「真名解放！　【鈴鹿御前】!!」
　力が解放されると鈴鹿御前の魔力が増幅された。剣を構え、空中で浮遊していた２本の剣にも魔力が増幅され、光の刀となった。
　鎧騎士の槍に黒い魔力が溜まり、その槍を放つ。投擲された槍は黒い嵐となって、鈴鹿御前に襲い掛かる。
　黒い嵐は廊下を抉り、崩壊させた。校舎が崩れる中、一直線に襲い掛かる黒い嵐。
「うおぉぉぉぉ!?」
「チャイちゃん!?」

崩落に巻き込まれたチャイカも宙を舞い、落下していく。
それを見た鈴鹿御前は宙に浮いてある刀の1本を操作して、チャイカの方に飛ばした。刀はチャイカの服を貫通し、チャイカごと崩壊されていない柱に突き刺さった。チャイカは柱で固定された。
「ちょっとお……私の扱い雑じゃない？」
「死ぬよりマシっしょ？　さぁてと、あの投擲をどう受け止めようか」
黒い嵐の前に鈴鹿御前は刀を構え、空中に展開させていた刀を正面に出して高速で回転させた。
回転した刀と黒い嵐がぶつかり、衝撃が放たれる。刀と槍がぶつかる度に火花が散る。
「くぅぅぅ!!」
鈴鹿御前は受け止めている槍まで近づくと握っていた刀を力いっぱい振りかざす。黒い嵐の槍は打ち上げられ軌道を変えた。黒い嵐の槍は空中で放たれ、散った。
瓦礫が落ちる中、鈴鹿御前と鎧騎士は地面に着地し各々、武器を構えた。
「30秒経ったっしょ」
「あぁ、上出来だ」
突如、鎧騎士の足元が光り出すと、光の柱が現れ、鎧騎士を閉じ込めた。閉じ込めら

れた鎧騎士は槍を振り回して破壊しようと試みるが光の柱はビクともしなかった。
「無駄だ。私の魔力を込めた結界だ。易々と破壊することはできない」
スーツを着た眼鏡の男が現れた。男は煙草をくわえ、鈴鹿御前に近づいてきた。
「ちょっとー、孔明っち遅すぎー」
「孔明っち……？」
諸葛孔明
中華は三国時代に謳われた天才軍師、諸葛孔明。
中国は三国時代に優れた政治家・軍人として広く知られており、弱小国である蜀が長きに渡り大国である魏に抵抗できたのも、彼の力に依るところが大きいと伝えられている。
ただし、この諸葛孔明は別だ。
諸葛孔明が時計塔の魔術師ロード・エルメロイⅡ世の肉体を器（依り代）にすることで疑似サーヴァントとして召喚された存在。本来は乗り移られた人間側の人格は英霊のものに上書きされるのだが、「自分の計略を十全に使える者がいるならば自分自身が活躍する必要はない」という極めて合理主義的な孔明の判断により、現代に詳しいエルメロイⅡ世が肉体の主導権を持つことになっている。
「そのあだ名は何とかならんのか……」

ロード・エルメロイⅡ世改め諸葛孔明はため息を漏らしながら結界に閉じ込めた鎧騎士に近づき、観察した。
「シャドウサーヴァントに近い存在のようだが、先の戦闘で回復しているところを見ると、どこかに魔力リソースが存在するのか」
「あー、死ぬかと思った」
「流石にチャイカでも死んだと思ったよ」
柱にぶら下がっていたチャイカは孔明とは別のスーツ姿の男に助けられていた。
スーツ姿の男はワイシャツと少しラフなビジネスファッションをしているが完全に目が死んでいた。
「社～」
「はいはい、今下ろしますよ」
スーツ姿の男の名は社築。
３０歳男性ＩＴ企業の社員、プログラマーでそれなりに優秀。
また、自他ともに認めるオタクでもあり、一般的な漫画の他に萌え系の漫画や昔のアニメ、レトロゲームやカードゲームにも造詣が深い。
「で、孔明。コイツは？」
「うむ……おそらくシャドウサーヴァントに近しい存在なのは間違いないが……ただ」

「ただ？」
「何の英霊なのかが分からないのだ」
「はい？」
　孔明の答えに社は唖然とし、近くにいたチャイカと鈴鹿御前は首を傾げた。
「何の英霊か分からないって……いやいや、孔明さん？　相手は宝具も使っていたのだから一発で分かるでしょ？」
「あぁ、確かにヤツの宝具は見た。嵐を呼ぶ逸話を持つ槍自体も存在するが……問題ないのはその逸話の槍とヤツの持っている槍の構造が大きく異なる。逆に言うとあの槍の構造で嵐を呼ぶことができる逸話を聞いたことがない」
「それってつまりどういうことだってばよ？」
　思わず頭を抱えるチャイカ。それを横目に苦笑いをする社。
「つまりだ。ヤツは存在しない英霊……もしくは複数の英霊が混じった存在。ということだ」
「そんなことがあり得るのか？」
「普通はありえん。だが、今は聖杯乱戦の真っ最中。この戦いに使用している儀式も特殊だ。このようなバグが起きる可能性は十二分にある」
「なるほどね……で、コイツはどうするの？　このままってわけにいかないでしょ？」

チャイカは閉じ込められている鎧騎士を指さす。鎧騎士はいまだに結界を攻撃していた。
「あぁ、中途半端に攻撃しても再生するだけだ。だからこそ、一撃で葬れる力を持つ者を呼んできた」
孔明が手を上げると木々の影から高そうなスーツを着た男がやってきた。その隣には傷だらけの黒いフルプレートを纏った漆黒の騎士が立っていた。
「誰かと思ったら加賀美じゃん」
「こんばんわ、チャイカさん」
加賀美ハヤト
玩具会社、「加賀美インダストリアル」の若き社長。
爽やかな声とユーモアのあるキャラ性を持った、少年の心を忘れない大人。自身を娯楽コンテンツと称し、リスナーを楽しくさせることを基本行動理念としている生粋のエンターテイナーだ。
「加賀美のサーヴァントって」
「えぇ、ランスロットさん」
ランスロット
円卓の騎士の一人で、湖の騎士にして裏切りの騎士。

あまりにも多くの栄誉に浴しながらも悔恨のうちに果てた騎士の執念、とりわけ王と王妃に向ける決して答の出ない愛憎の念ゆえに、彼は永劫の狂気に囚われ続ける。
「なるほど、確かにバーサーカーの火力なら一撃で倒せるわ」
「では、準備をいたします。真名解放！【ランスロット】!!」
ランスロットは光の結界に近づくと握っていた剣に魔力が集まる。膨大な魔力で握っていた剣は黒い魔力で包まれた。
人ならざる者によって鍛えられた、決して刃こぼれしない無窮の剣。同胞殺しの魔剣。
魔力が満ちた魔剣をランスロットが構えた。
「加賀美、孔明が結界を解除した瞬間がチャンスだ」
「ええ、分かっています。それにこの一撃を逃したら、私は魔力切れで負けです」
「相変わらず、バーサーカーの燃費は悪いな。んじゃ、孔明！」
「承知した」
孔明は指をなぞると鎧騎士を閉じ込めていた結界の光が弱くなった。やがて光の結界が消滅すると鎧騎士はランスロット目掛けて突っ込み、槍を振り上げた。
「宝具解放！　無毀なる湖光（アロンダイト）!!」
「Ａａａａａａｒｔｈｕｒｒｒｒｒーーーー!!」

ランスロットは雄叫びのような声を出しながら鎧騎士の懐に潜り込み、漆黒の斬撃を放った。漆黒の斬撃は鎧騎士を一刀両断し、そのまま校舎及びその裏にある山も一緒に一刀両断した。凄まじい衝撃で周面の瓦礫は粉々になり、木々は折れて吹き飛んだ。

衝撃の突風で各々、飛ばされそうになるが何とか踏みとどまった。

やがて、突風が収まり様子を伺うと一刀両断された鎧騎士はその場に倒れ込み消滅していった。

「……勝利を……聖杯を……この手に……」

鎧騎士はそう言い残すと完全に消滅してしまった。

「いったい、あの影のようなサーヴァントは何だったのでしょうか？」

「分らん。だが、ベルモンドから似たようなヤツを見たって連絡があったぞ」

「本当ですか!?」

「あぁ、そいつは刀を持っていたそうだ。それに体中から刀を生やして触手のように戦っていた共言っていたな」

「体から刀を……刀ということは」

社、加賀美はチャイカと鈴鹿御前の方を向いた。チャイカも釣られるように鈴鹿御前を見た。

「ちょっ!?　流石に体から刀を生やせる英霊とか知らないし！　確かに刀っていう事は

日本だと思うけど……妖怪とかの類かな？」
「確かにそのような逸話を聞いたことがありません」
「刀に……槍……セイバーとランサー？」
「つまり、他のクラスのサーヴァントもいる可能性が」
憶測が飛び交う中、加賀美は自身のスマホを取り出した。
「どなたかが遭遇する可能性もあります。急いで情報を共有します」
「あぁ、頼む。……しかしまぁ」
社はため息を漏らしながら天を仰いだ。
「聖杯乱戦どころの騒ぎではなくなってきたな」